
墮天使の行方-First chapter-

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮天使の行方 - First chapter -

【Nコード】

N1354F

【作者名】

種原美穂

【あらすじ】

帝国が満を持して世界へと放った娯楽飛空艇・エリザベス。その一室で身を休めていた少女・アイカ。誰もが疑わなかった運命。しかし、束の間の休息は、一瞬にして崩れてしまった……。

IC・愛の言葉

あの日も、確か　夕陽はわたしを照らしていた。
けれど、今は違う。あの日と異なる点はいくつもあった。

信じていたのに、信じることもなてできなかった。

キミのことが好きで好きでたまらないのに、わたしはキミのことを信じることもなてできなかった。

いや、信じていないのはわたしのほうだったよね。

ごめん、勝手に他人のせいにした。……こうやって謝ったとしても、キミは許してくれない。

わたしが信じることができなかったせい、なのかな……？

キミはどんな表情をするのか、わたしにはわからない。

わたしが勝手に予想すれば　キミはきつと泣くだろう。泣いて泣いて、1日中泣いているのかもしれない。

だけど、いつかはきつと、わたしのことを忘れていると思う。忘れていてほしい。

わたしに、キミの存在は眩しかった。

遠い世界の人だった。

神様が与えたこの運命。わたしは抗おうともせず、ただひたすらに進んでいく。

同じ動作を繰り返す、人形のように　。

誰かに操られた人形を解放してくれる人物が現れたその日からわたしの運命は変わった。

楽しかったあの日々を、今からわたしは破滅させていくことになる。

キミの考えていることなんてわたしにはわからない。

だけど、わたしはキミのことが好きだった。

だから、わたしはキミを巻き込むわけにはいかない。

今までありがとう、て礼を述べても、キミは「どういたしまして」なんて返事をくれないだろう。

そんなこと、わたしは知っている。

じゃあね。

そう呟いて、わたしは腕を振り下ろした。

FC-1・娯楽飛空艇へ侵入

帝国が満を持して世界へと放った娯楽飛空艇・エリザベス。帝国が発表してから全世界で注目を集めた世界最大級の娯楽飛空艇は、今日、空へ羽ばたいた。

帝国製の娯楽飛空艇の全長は約150m。この圧倒的な長さが、娯楽飛空艇・エリザベスの特徴の1つで、全世界が注目した。

そして、特徴的な部分は多彩な場面にも散りばめられている。娯楽飛空艇の中は豪華をイメージさせる造りで、帝国らしさも強調されている。

最早1つのライブコンサートが開ける程の広さを持つ大広場。客1人1人が持てる個室。全世界の有名店舗が作り出す料理。そのような「贅沢」とも言える娯楽飛空艇・エリザベス。

その中の個室で身を休めているのが、アイカという少女だった。

「す、すごいなあ……。さすが全世界のメディアが注目する娯楽飛空艇『エリザベス』……。はあ、想像以上に贅沢が散りばめられている……」

娯楽飛空艇に入ったアイカは、視界に飛び込んだ帝国らしさをイメージさせる空間に驚愕していた。

「こんなのを見せられたら、1年以上前から予約して、それからずっと待っていたのを忘れさせられちゃう……」

アイカが娯楽飛空艇内を見回していると、突如アイカの後方から声が掛けられた。

「アイカ・エリランヌ様……ですか？」

「あ……はい」

名前が呼ばれ、アイカは後方を振り向く。そこには、メイド衣装に身を包むメイドがいた。

「お待たせいたしました。今回、アイカ・エリランヌ様のお世話をさせていただきます、メイドのレイニでございます。以降、よろしくお願ひします」

「は……はぁ……」

そう言うと、メイドのレイニはアイカの前方に立った。

「今回、アイカ・エリランヌ様のお部屋は、後層・3階にあります、3-12号室になります。では、ご案内をします」

メイドは歩き始めた。アイカも迷子にならないよう、メイドの後方を歩いていった。

メイドに案内されて数分後、ようやくメイドの歩きは止まった。

「こちらが、アイカ・エリランヌ様の個室でございます」

メイドにそう言われ、アイカは右にあるドアを見つめた。そこには「3-12」というプレートが掲げられていた。

しかし、ドアについているのはプレートのみだった。ドアノブすらもついていなかった。

「あの……どうやってドアを開ければ……」

「こちらは、自動ドアとなっております。しかし、鍵はロックされますのでご安心を」

メイドは、ドアの横に設置されている装置に手を触れた。

『認証、確認……しました。暗証番号を唱えてください』

「……へ？」

いきなり、装置のスピーカー部分から声が出たので、アイカは思わず驚愕した。

メイドはそのことに驚愕せず、暗証番号を唱えた。

「『B12ICDF5』」

「……暗証番号……長い」

アイカが暗唱番号が長いことに感嘆した。

『暗証番号、認証……確認しました』

瞬間、ドアが自動で開いた。

「……す、すごいですね……」

「これが、世界最新のセキュリティです」

「さ……さすが、娯楽飛空艇……」

ここまでしてしまうのか、とアイカは世界の最新技術を改めて知らされた。

「あ、でも……暗証番号で唱えるんですよね？他のお客さんとかに聞こえたりしたら……まずいんじゃないんですか？」

「そこはご安心を。最初に手を触れてもらいます。この記憶装置には、個室の使用者　今回はアイカ・エリランヌ様、使用者の担当のメイド　今回はわたし、そして、王族の方の手相のみが認証されるように記憶されていますので」

「……は……はあ……。あ、でも……先程の暗証番号……わたし、いくらなんでも覚えられないんですけれど……」

「使用者には、暗証番号が記されたカードを提示しております」

メイドがそう言うと、懷からカードを取り出した。そして、アイカに手渡しした。アイカは受け取り、中身を確認した。そこには『B12ICDF5』と記されていた。

「アイカ・エリランヌ様は、そちらの暗証番号を唱えていただければ、認証します」

「分かりました」

そう言うと、アイカは懷にカードを入れた。

「では、個室の中をご案内します」

メイドは、部屋の中へと入っていった。後に続いてアイカも中に入ると、ドアが自動的に閉まった。

そして、メイドがスイッチを押したのか、暗闇で包まれていた部屋は、明るくなった。

「……わ、すごい」

アイカの視界に入ったのは、娯楽飛空艇の中とは思えない部屋の豪華さだった。シングルベッドとテレビはもちろん、冷蔵庫とテー

ブル、トイレや風呂、パソコンまで完備されている。

「……料理の注文などがありましたら、そちらにありますインターホンにて注文してください。今日のスケジュールはテーブルの上にありますファイルの中に記されております。……では、ごゆっくり必要なことを告げて、メイドは部屋から去った。

「……さすが、全世界のメディアが注目する娯楽飛空艇・エリザベス……」

アイカは必要な荷物を下ろした。

「うん……楽しみ。任務なんか、忘れて」

そして、荷物の中から、細くて長いものを取り出した。

FC - 2・偽りの王妃

アイカは、個室の中にあるベッドの上で、身体を倒していた。

「さすが娯楽飛空艇・エリザベス……。ベッドもふかふかで気持ちいいよお……」

アイカは身を休めた。

「……と、寝ちゃダメよね。せつかく任務とはいえ、娯楽飛空艇の催し物ぐらいには参加しておくべきよね。……顔を知っていたほうが、任務も遂行しやすいだろうし……」

アイカは身体を起こし、ベッドから出た。そして、テーブルの上に置いてあるファイルを開き、今日のスケジュールを確認した。

「今日は……。『王妃・レヴェーニア様生誕パーティー』……。……で、ええっ！？今日ってレヴェーニア様の誕生日なの！？」

アイカは驚愕し、ものすごい勢いでファイルを閉じた。

「レヴェーニア様の生誕パーティーが、この娯楽飛空艇・エリザベスで行われる……。！？……嘘。あの人はそんなこと、わたしに1度も忠告しなかった。……わざと？」

アイカは何かを思いついたのか、個室からすがたを消した。

ドームの面積よりも遥かに広い面積を持つ、娯楽飛空艇・エリザベスの第1ホール。そこで今日、王妃・レヴェーニアの生誕日を祝うパーティーが、開かれていた。

第1ホールに入って直線、その先に特設で設けられた王族のみが座することを許される椅子で、王妃・レヴェーニアは座っていた。

今日という日のため、レヴェーニアのために用意された料理は、どれもが有名店舗から出された料理の品々で、高価なものがばかり

が用意されていた。

「フェリ。ワインを注いできて頂戴」

レヴェーニアの横に立つスーツすがたにサングラスをかけた男性が反応をした。

「……かしこまりました、王妃様」

男性　フェリは、レヴェーニアからグラスを取り、その場から歩き始めた。

その時、第1ホールの中に、新たな人物が入った。

「……うわ、広い。迷いそうになる」

それは、アイカだった。

アイカはレヴェーニアのすがたを一目見ようと、生誕パーティーが行われている第1ホールへとやってきたのだ。

「えとえと、レヴェーニア様は何処にいるのかな……、と。あ、見つけた！」

アイカがいる場所から直線、その先にすがたは小さいが、王妃・レヴェーニアを発見することができた。

「あれが次期国王候補のレヴェーニア様……。初めて生で見た……すごいなあ」

レヴェーニアを発見した瞬間、アイカはレヴェーニアについて述べた。

……が。

「でも、美しくはない」

アイカは低く、小さく呟いた。そして、レヴェーニアがいる場所まで一直線に、走り始めた。

レッドカーペットで敷かれたその場所は、足音が小さかった。そのため、遠くで会食している帝国人には、アイカが今走っていることに気づいてはいない様子だが、近くにいる帝国人は、何があったのかばかりに、アイカに視線を集めていた。

そして、アイカはレヴェーニアの前で、足を止めた。

「……わたくしに、何か用かしら？ 庶民風情が」

今日のパーティーの主役のレヴェーニアの眼前に庶民が現れた。そのことが、周囲は騒然とし始めた。

アイカはレヴェーニアに向かって微笑むと、瞬間、レヴェーニアの胸辺りに、細くて長い剣 レイピアの剣先を向けた。

「……」

レヴェーニアは驚愕の表情を見せた。

「庶民風情が……何の真似？ 今すぐ剣を収めなさい！！」

レヴェーニアは叫ぶが、アイカは剣を収めようとはしない。床を見つめているせいか、アイカの表情が分からない。

「もう終わりだ！ 王妃様の命に危険を与えたとして、貴様を逮捕する！」

レヴェーニアに注文されたワインを注いだきたスーツ男・フェリは、アイカに向かってそう叫び、拳を突き出した。アイカはその場から1歩も動こうとはしない。

「……遅いよ」

アイカはそう呟き、レヴェーニアにレイピアを向けている片手とは逆の手には刀を握り、容赦なくフェリの身体を切り裂いた。

「きゃあああああつ！！」「うわあああああつ！！」「いやあああああつ！！」

帝国人が叫び、一斉に1番ホールから脱出しようとする。フェリは呻き声をあげ、その場で倒れてしまった。

「ちよっ……、フェリ……？ 何故、庶民程度で倒れているんですの！？ 立ちなさいよ！ わたくしを守るのがあなたの務めでしょう！？」

レヴェーニアは、必死になって、倒れてしまったフェリに向かって叫ぶ。しかし、身体を引き裂かれたフェリは、レヴェーニアの声に反応することがなかった。

「……許さないですわよ。王族のわたくしをこんなにも激怒させるなんて……。死刑確定ですわっ！！」

レヴェーニアが叫んだ。アイカはレイピアを収め、刀を握った。
「言葉だけで、あなたは何もしようとはしない。自分自身を自分自身で守るうとしないもの。分かっている。……だから、わたしはここに
いる」

アイカは顔をあげた。アイカの視線は冷酷だった。

「他人がいないと、安心できない。いざという時に、あなたは何も
できない」

アイカの言葉が心に刺さったのか、レヴェーニアは困惑な表情を
浮かべた。

しかし、その表情は次の瞬間にして破られた。レヴェーニアは微
笑した。

「それは偽りのわたくしですわ。今のわたくしには、守れる力があ
りますわっ！！」

レヴェーニアは懷から、杖を取り出した。杖の先には球体が淡い
光を放っていた。

「これが何か、分かるかしら？」

「ついに正体、現したわね。王妃・レヴェーニア。 10の秘具
の1つ・『連』の一部を所持。即刻、逮捕する」

「わたくしは、王妃ですよ？庶民風情が、わたくしを逮捕するな
ど、無駄」

アイカはレヴェーニアを標的と定めた。定めた次の瞬間、アイカ
は刀を振り上げた。

FC-3・最後の戦い 最初の戦い

アイカが刀を、振り上げた。

「このわたくしを、フェリのように切り裂くことが可能ならば、今すぐ切り裂けばいい。だけど、その行動は無意味なのよ?」

「……確かに、守れる力はあるのかもしれない。だけど、その力は誰のためにあるの?」

レヴェーニアは、当然のように叫んだ。

「使用権限者のわたくしの身を守るためにある力。それが、『連』ですわっ!」

杖 『連』の一部をアイカに向けた。瞬間、杖の先から光が放たれ、レヴェーニアの眼前に鉄壁を作り上げた。

「さあ この鉄壁を打ち破ることが可能かしら?」

レヴェーニアの挑発。勝利を確信するかのような、表情。

しかし、アイカは挑発を受けようとはしなかった。アイカはレヴェーニアに対して告げた。

「なんて可哀想な人なんだろう……ね。そういう人って、後に後悔することになる」

「可哀想?このわたくしが?変な事を言うわね」

アイカはついに、刀をものすごいスピードで振り下ろした。『連』の一部で作り上げられた鉄壁は、刀と接触した次の瞬間、バラバラに碎け散った。

「なっ……!! 何で、鉄壁が碎け散って……っ!? アンタ、何者なのよっ!？」

「世界を旅する1人の旅人 そういう設定で結構ですよ。まあ、普通の人間ではないことは確かですけどね」

そして、躊躇いなくレヴェーニアに向かって刀を振り上げた。

「いやあああああつっ!!」
悲鳴を上げ、レヴェーニアも倒れた。

アイカが刀で身体を切り裂いた2人を見下していたアイカは、懷から小型通信機を取り出した。

「任務完了しました。はい、標的は『連』の一部を所持。わたしは、標的とその護衛の身を切り裂きました。処理はどうすればいいですか？　いつも通りで。はい、了解」

電子音が鳴り、アイカは小型通信機を閉まった。

娯楽飛空挺・エリザベス。一夜にして、娯楽飛空挺での休息は崩壊した。

「ま、いいけれど　どうせ、こういう運命だったから」
アイカはその場を後にした。

次の日。「青空通信会社」という名称の出版社が発売した「青空スクープ」という雑誌に、あるネタのスクープ記事があった。

『帝国が放った娯楽飛空挺・エリザベスの中で何が起きた!?
王妃・レヴェーニア様の急死。原因は、何者かによる殺傷!?』

当然、娯楽飛空挺・エリザベスでこのような事件が起きるとは想定していなかった世界の国民は、この事件が報道された時は騒然とした。

そんな状況の中で、1人の少年が事件について呟いた。

「王妃を殺す……ね。そんなことするのは、あそこしか有り得ない」

少年は呟き、空を見上げた。

「これを機に最後の戦いとする。壊滅状態にしてみせる。……そのために、潜入を考えなければいけない」

そして少年は、ある組織を壊滅させる為の計画を実行することになる。

「最後の戦い」になるはずだった戦いは、「最初の戦い」に変化してしまうことを知らないまま。

少年がいる場所　王都・エルヒートの一室で、会議が行われていた。

「レイスは、最前線で攻撃。　わかったわね？」

「わかった。これでおれは……星龍騎士を辞める」

「　　頑張つてね」

少年　レイスは頷いた。

「只今より、ガラシリオン硝子の社　壊滅任務を開始する！」

そして、「最初の戦い」は始まった。

FC-4・二重刀 アイカ・エリランヌ

レイスは、硝子の社を壊滅させるべく、本拠地へ潜入することにする。

星龍騎士の仲間が先に内部へ潜入して、本拠地を爆発して挑発する。それと同時にして、レイスも本拠地へ潜入。という設定だ。

本拠地の内部が爆発するまで、レイスは付近の木陰に隠れて待機することになっている。

「爆発は まだ、か」

そう呟いた次の瞬間、レイスの周囲で音がした。

「……」

硝子の社の手先かもしれない。そう察したレイスは、可能な限り、気配を消した。木陰から、音の正体を確認する。レイスが見つめる視線の先に、人影が見えた。しかも、右手に何か、剣でも握っているようだ。

「……手先、か？」

人影が、レイスのもとへ接近していた。走っていた。

「迷っちゃった。ここ、何処なのかな？」

人影から聞こえた声は、女性の声だった。人影の正体が女性だということが明らかになる。だが、相手は剣を握っている。油断してはならない、とレイスは判断した。

「何でわたし、こんな所にいるんだろう？」

女性はどうかやら、迷子になっているようだった。硝子の社本拠地付近にして、硝子の社の奴が迷子になることは有り得ない。そう判断したレイスは、女性のもとへ接近しようと、立ち上がるうとした。

が。

「あ、誰か発見……」

逆に、女性に先に発見されてしまった。

「……え」

立ち上がろうとした途中、しかも女性から声をかけられることを想定していなかったレイスは、思わず戸惑ってしまった。

「あの……、あそこにある大きな施設は何ですか？」

女性は人差し指で指差した。その先には
硝子の社 本拠地。

レイスは、回答するのに戸惑った。

「あなたも……わからないですか？」

「いや、わかるといえばわかるんだが……なんというか……説明ができてなくて……」

「わ、わたしのために、そ、そんな……。え、えーと……迷惑をかけるつもりはなかったんですけど……」

女性は困惑の表情を浮かべた。

「いや、おれも……悪い」

瞬間、後方で爆発音が響いた。

バツコオオオ

ンツツツ！！！！

「……！！」

レイスは振り向いた。硝子の社 本拠地が炎に包まれていた。

「チツ、始まったのかっ！！」

レイスは立ち、硝子の社 本拠地へ足を進めようとした。

その時。

女性が、レイスの腕をつかんだ。

「何で、あそこはいきなり爆発したの？」

事情を知らない女性にとって、その疑問は当然だった。しかし、レイスには仲間が待っている。先を急がなければいけない。

「ごめん。おれはもう

行かなければいけない」

「何処へ行くの？」

女性がレイスをつかむ腕の腕力が、徐々に強くなっていく。一般の女性とは思えない、腕力。

「キミ、何か武術でもやっているのか？」

「わたし？ わたしのこと、何も知らないの？」

「……え？」

女性は笑みを浮かべた。

「わたしのこと、知っているのかと思った。だけど、違ったみたいだね。」

瞬間、女性は右手に握っていた剣　刀を振り上げ、レイスに向かつて振り下ろそうとした。

「……！」

レイスは女性の腕を振り払い、後方へとジャンプした。刀は、レイスの眼前で振り下ろされた。1歩間違っていれば、間違いなくダメージを受けていたところだった。

「な、何するんだよっ！」

「あ、ご、ごめんなさい。でも、標的を定めたのに回避するなんて、さすが　かしら？」

女性の表情が変わった。口調も変わった。

「お前　おれの敵だな？」

レイスは、武器　身の丈ほどある鎌を取り出した。

「鎌……へえ、あの子と同じ」

「だから、お前は誰だっ！ 述べないなら、殺す」

少女の口元が緩んだ。

「わたしは、二重刀　アイカ・エリランヌよ。硝子の社の『狩人』の1人。もちろん、あなたのことも知っている」

「……！」

女性　アイカはの視線が、先程のもととは変わった。冷静な視

線が、レースを見つめた。

「星龍騎士初段、レース・ネフィリー。わたしたちを敵と定めているようだけど。そして、今日の戦争が終われば、星龍騎士を辞職するらしいけど」

「何でそんなことまで、知っている！？ 答えろっ！！」

アイカは左手にレイピアを握った。

「もちろん、命令されちゃった。やっと後処理も終わったばかりなのに。まあ、いいわ。人を殺すと愉快なもの」

「チッ……畏だったのかっ！！」

「二重刀 アイカ。只今から、星龍騎士初段、レース・ネフェリー抹殺を開始」

そして、アイカとレースの戦いは始まった。

FC-5・戦闘、そして仲間を捨てるために

星龍騎士・レイスと、二重刀 アイカとの戦闘が始まった。

まず、攻撃を開始したのはアイカだった。左手にレイピア、右手に刀を装備して、レイスのもとへ瞬間移動した。レイスは懷から黄金色に包まれた球体を取り出した。その球体は光を帯びて、レイスの周囲を光で包んだ。

「あれ？なんだろ、それ。見たこと……あるけど、忘れた。でも……本当に星龍騎士かな？」

「おれのことなんて、どうでもいい」

レイスも前方し、鎌を握りなおした。

「標的、定めて 攻撃っ！！！」

アイカのすがたを確認して、鎌を振り上げた。

「奥儀・竜巻の舞っ！」

レイスは、アイカの身体を対象として、鎌を振った。何度も振り続けた。

「とどめだっ！！」

最後に大きく鎌を振り上げ、アイカの身体を切り裂いた。

「ふう……」

連続した攻撃を終えたレイスは、とりあえず息を整えた。後方に吹き飛ばされたアイカは、床を見つめて腰を下ろしていた。

「ふふ……」

アイカの方から、声が聞こえた。

「あなたにとつては、必殺技みたいなものだったのかしら？そんな必殺技程度なら、わたしには勝てない」

アイカは立った。外見から判断すると アイカは、何処にも傷を負っていないようだ。

「あれだけ、攻撃したのに」

「そんなの、攻撃と呼ぶことなんてできない。ダメージなんて全く与えられていないから。はあ……、星龍騎士初段というのは、こんなにも弱いなんてね。」
軽蔑した」

アイカは、レイスを冷酷な視線で見つめた。そして、レイピアを消して、刀を両手に握って、構えた。

「二重刀のわたしと戦うには、まだ時期が早かったじゃないのかしら？ それじゃあ 哀れなる最期を、わたしの手で」

アイカは、レイスのもとへ移動した。そして、刀を連続して振り始めた。レイスも身軽に攻撃を回避していく。

「これじゃあ、何の意味もない。ということで、スピードアップ」
アイカが刀を振る速度を上げ始めた。さすがのレイスも、アイカの攻撃するスピードについていけなくなった。

そして、アイカの攻撃スピードが上回ったとき。

「うわああっ！！」

レイスの身体が、切り裂かれた。

その場で意識が遠のいて 倒れた。

レイスは、夢を見た。

その夢の中には、アイカがいた。

二重刀 アイカ・エリランヌと対峙していて、訓練を積み重ねたレイスは、アイカを倒すことができる夢。

そうならばいいのに、と レイスは心の中で思っていた。

「ん……？」

朝、起きた時にいつもレイスの鼻を刺激するコーヒーの苦い香りが、今日はなかった。

いつもは、星龍騎士の仲間がレイスを無理矢理でも起こしに来るはずなのに、そのせいかいつもは賑やかなのに 誰の声も聞こえなかった。

「 まだ、起きないね」

「……！」

その声は、レイスが聞き間違えない限り、敵の 二重刀 アイカの声だ。

レイスは身体を倒していたため、起き上がった。その時、視界に移ったのは、予想通り、アイカだった。

「なんか最近、忙しいのよね。 あ、起きたんだ。おはよう」

アイカがレイスの起床に気づいたらしく、声をかけてきた。

「……なんで、お前がこんなところに」

「わたしがここにいるのは不自然なことじゃない。ここは、 硝子の社 本拠地・ガーネクスだから」

「 硝子の社 本拠地！？」

硝子の社 本拠地といえば、レイスが崩壊させようとしていた標的だった。しかし、標的とはいえ、星龍騎士の仲間が爆発させていたはず。 しかし、本拠地の内部は、爆発の跡が1つも残ってはいなかった。

「そんなはずないじゃない。 硝子の社 は、正々堂々と、本拠地のすがたを見せようとはしない」

「じゃあ……昨日のは……！」

「もちろん、嘘。誰かさんによってコントロールされた、強い幻覚よ。カモフラージュ、てわけ」

「くそ……」

「わたしたちを甘く見すぎていないかしら？ 攻撃も攻撃じゃないし、今すぐ殺してしまいたくなる。 あんたを」

これからどうすればいいのか。 敵の本拠地に入ってしまった
て、脱出は到底不可能。ならば、死んでしまっても、おかしくはな
いのだろうか？

「殺してしまってもいい。どうせ 脱出は不可能だ」

「じゃ、殺してもいいんだ。 と忠告するけど、わたしは殺し
たりなんかしない」

「……は？おれ、敵なんだぞ？」

アイカは不敵にも、微笑した。

「あなたの選択次第では、わたしもあなたの味方になるわよ」
レイスは驚愕した。アイカが味方になる？それはいつたい、どう
いう意味で。

「上司の命令なのよ。まあ、最終決定権はあんたにあるけど」
そう言つと、アイカは間をおいてから、告げた。

「星龍騎士初級、レイス・ネフィリー。わたしたち 硝子の社 に
入らない？」

「 え」

「と、上司に言われたのよ。どう？仲間になつてみる？上司が言っ
たから、それだけの素質があると見たんでしょうね」

レイスは、戸惑っていた。

「ちょ……なんで、おれが 敵の仲間になんか……ならなきゃ
いけないんだ？」

「別に悪くはない話だと思うわ。実際、わたしは 硝子の社 へ入
つて様々な訓練を受けて力をつけてきた。あんた以上の力をつけた。
入れば強くなれるでしょうね」

「そんな……おれは」

「仲間を失いたくないのはわかる。それでも、力を優先するという
のなら、わたしの仲間になればいい。もちろん、星龍騎士も、わた
したちの敵の一部にすぎない」

レイスは、仲間を傷つけていいのか、迷った。

確かに、硝子の社へ入れば、アイカのように強くなることができるだろう。敵の本拠地の脱出は不可能。しかし、仲間になれば脱出は可能となるかもしれない。

「ま、時間をかけてゆっくりと考えればいい。ちなみに、脱出なんて考えてないほうがいい。不可能だから」

アイカは、部屋を出た。

レイスの脳裏に浮かんでいたのは、たくさんの星龍騎士の仲間の笑顔の表情。

そして、レイスの彼女である、エリールの笑顔だった。

FC-6・そして、彼は生きる道を選んだ

アイカが、部屋から去ったことを確認してから、レイスは懷から携帯通信機を取り出した。ショートカット登録してあるボタンを押して、通信を始めた。

相手は、すぐに出た。

「もしもし。 レイス？」

「ああ」

その相手は、レイスの彼女・エリールだった。

「今日の任務は……今からか？」

「ううん。今日は何もないよ。休憩中、てところかな」

「そうなのか……」

レイスがそう言つと、しばらく2人の間が沈黙で包まれた。

そして、沈黙が破られたとき 。

「今、 硝子の社 の占領範囲に いる？」

エリールの声が、いつもより厳しく感じた。

エリールに本当のことを告げてしまったもいいのだろうか。しかし、エリールに告げたら当然、硝子の社 本拠地にいるレイスを救助しに来るだろう。しかし、レイスのことを監禁しているアイカにバレたら、当然、死んでしまうと考えたほうが適當だろう。

それでも、レイスは本当のことを告げた。

「ああ」

「……」

エリールの驚愕の音が、聞こえた。

「それ、本当なの……？」

「『狩人』の1人・二重刀 アイカ・エリランヌに監禁されている。脱出は無理、と考えたほうがいいだろう」

「う……嘘……」

エリールの声が、震えていた。レイスはエリールの気持ちを抑え

て、告げた。

「でも、上には告げないでほしい。なるべく、おれのこととは忘れてほしい」

「な……なんで……」

「けど、おれは エリールに会いに行く。その時は……『敵』なのかもしれないけど」

レイスの気持ちを察知したのか、エリールは叫んだ。

「そ……そんなの、絶対駄目だよっ!!」

必死になって叫んでいるエリールのすがたが、レイスの脳裏に浮かんだ。

「駄目だよ……そんなの……。あたし、レイスが敵になっちゃうの……嫌だよ」

「エリール……」

「絶対に許さないからねっ！レイスが 硝子の社 に入るとか……そんなの、絶対に許さないっ！ だって 好きな人を、傷つけたくはないから」

レイスの心の中で、何か熱い感情がこみあげた。

しかし、レイスはそれを抑えた。

「 あたしが、レイスを助ける。だから、待っていて」

「!! 待て、エリール。 硝子の社 は、エリールが考えているほど、そんな甘い奴じゃ」

「大丈夫だよ、レイス。 本当に あたしが、助けるからね」

エリールは一方的に、通信を切った。レイスは、携帯電話機を閉まった。

「ごめん、エリール。 だけど、おれが生き残るには この手段しかないんだ」

この時間だけ、我慢すれば またいつか、会えるから。

レイスは、そう信じていた。

「失礼するね」

ドアの向こうから、アイカの声が聞こえた。
ドアが開いた。アイカが部屋へと入っていた。

「彼女との別れの言葉は、済ませたかしら？」

「何で、通信していることを知っているんだ。あと、何でエリールのことを『彼女』だと知っている？」

「へえ……彼女の名前はエリール。星龍騎士2級、エリール・クリスファア。まあ、そんなことどうでもいいけど。わたしの言いたいことは、わかるでしょう？」

アイカは微笑み、単刀直入に告げた。

「わたしたち　　硝子の社　の仲間になるのかしら？　まあ

まずは、『狩人』準備段階になるでしょうけれど」

レイスは判断を下すまで、悩み続けていた。

そして、エリールと会話して　　決断した。

「おれは　　、　　硝子の社　に入る」

しばらく、部屋に沈黙が流れた。

そして　　。

「それが適当な判断でしょうね。これからは仲間ね。よろしく
レイス・ネフィリー」

そして、レイスは星龍騎士と仲間　　エリールを捨てて、　　硝
子の社　に入った。

F m・裏切り 対決

エリールは、ガラスリオン硝子の社 本拠地・ガーネクスに潜入を開始しようとしていた。

「きっと 大丈夫だよ。それに、レイスと約束したんだもん」

そして、エリールは彼との約束を果たすために、本拠地へと潜入した。

本拠地の屋上とも思われる最上階へ到着したエリール。

当然ながら、本拠地へ潜入した途端、硝子の社 所属の兵士が次々に襲いかかってきた。エリールはそれらを棒術具で薙ぎ払ってきた。

「はあはあ……」

息が切れていた。例え兵士とはいっても、エリールと力が互角だった。それでも、エリールは戦い続け、勝ってきた。

最上階の壁の先、誰かの影が見えた。

「だ、誰か……いるんでしょう？あたしを倒しに来たのなら……速やかにすがたを現すべきだと思うよっ！」

「そのすがたを見て、あなたが後悔するのを覚悟して？」

頭上から声が聞こえた。エリールは頭上を見上げた。そこには、宙に舞う女性がいた。

「あなた……誰？」

「もちろん、硝子の社の者よ。『狩人』No.2、二重刀アイカ・エリランよ。あなたのことは、知っている。」

星

龍騎士2級、エリール・クリスファー。棒術具を自由に操るそうね」

「……あなたが、レイスを監禁していた『狩人』ね？」

アイカはエリールがいる場所から数メートル離れた位置へと着地した。

「監禁している？人聞きが悪いわ。監禁しているわけないでしょう？訓練の相手をしてあげているのよ」

「！？」

「そして、彼は とても強くなったわ」
アイカは後方を振り向いた。

「これから、ショータイムと行こうかしら？」

彼女との対決よ、

出現なさい

『狩人』No.17 呪縛の鎌

レイス・ネフィ

リー……！」

「……！」

アイカが叫んだ次の瞬間
1人の少年が現れた。

アイカの姿が消え、その代わりに

「 約束、したのに」

その少年のすがたが視界に入った。紛れもなく、真実をエリールに映し出していた。

エリールの瞳に、涙が溢れそうになる。

「だけど、星龍騎士として 裏切り者は倒す」

エリールは、星龍騎士ではなく 『狩人』となったレイスに、

棒を向けた。

「あたしはキミのことをずっと……信じていたよ！だけど キミは信じてくれなかったんだっ……！」

レイスは、星龍騎士の時に使用していた鎌を握っていた。

「レイスがその気なら

あたしも、これでハッキリとけじめを

つけるから」

最後に涙を流しながら、エリールはレースに向かって微笑んだ。
そして 殺意の瞳で、走った。

Sc-1・エリール・クリスファアの挑戦状

硝子ガラシリオンの社 本拠地にて、アイカは 通信機である人に呼び出された。

「はい、もしもし。二重刀 アイカだけど」

「やあ、アイカ。ボクだよ」

聞いたことのある声に、アイカは思わず赤面してしまう。

「……『先生』！」

「そういえば、アイカ。例の事件 娯楽飛空挺の事件だったか

……、王妃が所持していた『連』の一部を回収する任務だったそうだね」

「は、はい！ 回収物は、収納室へ収納させていただきました」

「ご苦勞様。あと、例の人物、勧誘したそうだね？」

アイカの脳裏で、レイスのすがたが浮かんだ。

「星龍騎士初級……レイス・ネフィリーのことでしょうか」

「彼は、ボクらの仲間になったのかい？」

「あ、はい。『狩人』候補として、レイスを 硝子の社 へと迎えました」

「じゃあ、彼は今、何処にいるのかな？」

「レイスなら、身体の調整を行っています。数時間後には、わたしを加えたトレーニングを行う予定です」

アイカの通信機のスピーカーから、何か金属が動く音が聞こえた。

「でも 注意はしておいたほうがいい。油断はしないように。」

「……でも、彼はボクらの仲間だ」

「……え？」

「何でもないさ。じゃあ、彼の調整結果を待っているよ。彼はあの星龍騎士初級なんだからね」

「はい、朗報をお待ちください」

「わかったよ。じゃあ、頑張って」

そして、通信機は遮断された。
アイカの顔には、熱を帯びていた。

「さて、レイスのトレーニングまで時間に余裕があるし……何をしようかなあ？」

アイカは、廊下を歩いていた。

その時、アイカの視線の先に、人のすがたが見えた。

「幻想の死神 ソウマ……」

「二重刀 アイカ・エリランヌか」

アイカは、人の正体をの名を呼んだ。相手

幻想の死神

ソウマも、アイカの名を呼んだ。

「任務を終えた……て、表情をしているよ？」

「実際に任務を終えてきた」

無表情のまま、ソウマは呟いた。

「ふーん。まあ、いいけれどね。そういえば、何か任務とか余っていない？ 今なら、極秘組織の暗殺でも結構だわ」

「なら、星龍騎士の抹殺でもしてこればいい。あそこは、雑魚だし、人数が多いだけだ」

「確かに一理あるわね。じゃあ……抹殺でもしますか」

アイカはソウマに微笑み、そして横を通り過ぎた。

アイカは、星龍騎士を抹殺するために、外へと出た。

「さて、今回はあっさりと殺しちゃうか、じっくりと殺しちゃうか……。あっさりのほうが、快感を覚えるわ」

そして、今回は標的を定めたらすぐに抹殺すると決意して、周囲を歩いていた。

星龍騎士には本部がないため、単独的に行動している星龍騎士が多い。レイスのような奴がいい例だ。

「星龍騎士初級、て結構位が高いはずじゃなかったかしら……。なのに、戦力は劣っている。何に特化しているというのかしら？」

独り言を呟いているその時、視界の先に、星龍騎士らしき人影を発見した。見た感じからは、女性のようなうだ。

「星龍騎士2級、エリール・クリスファア。確か、レイスの彼女だったわね。ここで殺しておいたほうが、レイスも 硝子の社の任務が遂行しやすくなるわね」

そう思い、アイカはエリールの前にすがたを現した。

「あれ……？何で、一般人がこんなところにいるんですか？」

アイカは、人格を作り、演技をした。

「あ、あの……。ここって何処でしょうか？わたし、迷ってしまったようなんです。方向音痴のせいでしょうか」

エリールはアイカに微笑み、言った。

「ここは、あたしたちの敵の本拠地がある場所なんです。なるべく近寄らないほうが身のため……と、考えたほうがよいでしょう」

「敵……で、誰ですか？」

「硝子の社」という組織の本拠地です。詳細はあまり話せないんですけど……あ、あたしは」

そう言い、エリールが自己紹介をしようとしたその時。

「星龍騎士2級、エリール・クリスファア。棒術具を自在に操る、期待の星。そして、レイス・ネフィリーの恋人」

アイカが、エリールの正体を言った。

「な、なんであたしのことを知っているんですか？」

「だって、わたしが『狩人』だから」

瞬間、右手に握っておいた刀で、エリールの腹を切り裂いた。

「！！！」

あまりにも唐突すぎる出来事により、エリールは腹を抱え、腰をおろした。

「……あなたが、硝子の社の『狩人』？」

「疑うのなら、聞いてみるといいわ。わたしは『狩人』No.2
二重刀 アイカ・エリランヌ」

アイカの名を聞いたエリールは、棒術具をアイカに向けた。

「あなたが……レイスを監禁しているの？」

「監禁している？何で、レイスを監禁しなきゃいけないの？人聞きが悪いわ。レイスは、自らの意思で 硝子の社 へと入ることを決意した」

「…… そんな……」

アイカは口で笑い、そしてエリールに真実を告げていく。

「そして、今は身体の調整を行っているわよ」

「そ、そんな……。わたし、レイスと約束したのに……」

「約束？」

エリールは、悶えながらも、言った。

「敵になんか、教えたりなんかしない……。レイスを変えてしまったあなたなんか、レイスを……渡したりなんかしない……！！」

そのエリールの考えに、アイカは笑った。

「アハハハハハハッ！！」

「な、何がおかしいのっ！」

「それ、現実性を考えているのかしら？」

エリールは、顔を真っ赤にした。

「そ、そんなの……当たり前でしょっ！？」

「じゃあ、実際にやって見せなさい」

「……え？」

エリールは、驚愕の表情を見せた。

「レイスを、硝子の社 から引つ張り出すことができるのか。やってみるといいわ。どうせ 無理よ」

「どうして断言……するの？」

「わたしは1度、星龍騎士初級であるレイス・ネフィリーと戦い、勝った。それは、圧倒的な力の差を見せつけてね」

「え」

「それでも、あなたは運命に抗うんでしょう？それならそれで、別に構いはしない。だけど、わたしは全力でああなたの邪魔をする」

エリールは、笑った。

「それで結構ですよ」

そして、エリールは呪文を唱えた。アイカに切り裂かれたはずの傷は、瞬く間に癒された。

「あたしの挑戦状、受け取ってくださいね？」

「分かったわ」

次の瞬間、アイカとエリールの視界を、漆黒の暗闇が包んだ。

SC - 2・『天地計画』第1章

硝子の社 本拠地内・実験室と呼ばれるその部屋にて、『先生』と『狩人』の1人・幻想の死神 ソウマと、一般兵士が収集していた。

「みんなに集まってもらったのは、説明しなくても分かっていると思う。だから、説明など不要だね」

一般兵士は、『先生』とソウマを取り囲んで、微動も動かなかった。

「遂にあんたの企みが、始まるのか」

「企みだなんてヒドいなあ。ま、計画とでも呼んでよ。今から開始する計画　そうだなあ、『天地計画』とでも呼ぶことにしよう」

『先生』は笑い、告げた。そして、右手に握っていた金色に輝く長い杖を空へと掲げた。

「只今より　『天地計画』第1章を始める」

『先生』が宣言すると、金色に輝いていた杖の先端から漆黒に染まる光が溢れ出し　実験室を支配した。

誰かが、アイカの名前を呼んでいる気がした。

そう察したアイカは、瞼を開けた。視界が一気に明るくなった。そして、その視界に映っている人物は　。

「……レイス？」

そこには、私服に身を包んでいるレイスのすがたがあった。

「大丈夫か？アイカ」

アイカの知らない間で、レイスはアイカの名を口にしていた。

「レイス……。いつの間に、わたしのことをアイカと呼ぶようになったのね」

「だって……仲間だろ？」

アイカは笑った。

「そうね。あんたは、もう　仲間よね」

アイカは身体を起こした。今思えば、アイカは個室のベッドで寝ていたらしい。個室とは、アイカ専用の部屋のことだ。

「何でレイスが、わたしの部屋にいるのよ」

「だって身体調整を終えて、今度はアイカと訓練する予定らしいから」

そういえばそうだった　と、今更になってアイカは思い出した。

「だけどさ、アイカは何で、本拠地から離れていたところで倒れていたんだ？」

「……そういえば、ソウマと話して、任務に出るつもりだった。そこまでは覚えているのに　任務に行ったあとから、何も思い出すことができない。そこで会った人の名前も、すがたも　忘れてしまった？」

「え」

レイスは驚愕した。

「記憶喪失になった？」

「だけど、任務に行つてから、ここにいることまで、全部忘れているだけ。一部だけ記憶喪失になっているだけ。全部、忘れたわけじゃない」

2人の間に、沈黙が流れた。

「アイカ。　今日の訓練は、中止にするか？」

「わたしはただ、記憶喪失になっただけ。訓練に支障はない。5分後には始めましょう」

アイカは個室から出た。

「 エリール」

今は何処で何をしているのだろう。そう思って、彼女の名を口に
した。

「 今だけ、我慢していてほしいんだ」

そう呟いて、レイスはアイカの部屋を出た。

SC-3・目覚め始める能力

訓練室の中で、レースの訓練が始まろうとしていた。

「さて　　只今から、レース・ネフィリーの訓練を実施する。参加するのは、レースとわたし、それから一般兵士たちよ」

アイカの横にいる一般兵士たちが、レースに頭を下げた。

「その前に、レースに聞いておきたいことがあるの。　　星龍騎士は、何に特化しているというの？」

星龍騎士に特化しているもの。

「星龍騎士は、神の存在を『在る』と考え、神から与えられた運命に従う存在。それが、星龍騎士。もし、神の存在が本当に『在る』ならば、星龍騎士は人間の歩むべき運命が分かる」

「神　　か。わたしたち　硝子の社　に反抗してきたのは、星龍騎士からだったことは、『先生』から聞いたことがある。それほどんな動機があったから？」

「神が地上へと贈った支配物　　10の秘具　を、　硝子の社　が回収を開始したから。先日、娛樂飛空艇・エリザベスで、事件が起きた。　10の秘具　の1つ、『連』の一部が盗まれた事件だ」

アイカは、娛樂飛空艇で行っていた任務のことを、思い出した。

「おれたち以外で回収するのならば、　硝子の社　以外はないと思つた。　回収したのは、アイカだろ？」

極秘にされた娛樂飛空艇・エリザベスでの事件。各メディアで取り上げられたのは、『王妃・レヴェニアの死亡』程度だ。しかもアイカが　10の秘具　を回収する任務を行ったことは、　硝子の社　の者以外で知る者はいないはずだった。

「！！　何で、レースがそのことを知っているのよ」

「娛樂飛空艇・エリザベスの乗客名簿を調べた。その名簿の中に硝子の社　の人間がいたのは、アイカだけだったからだ」

「星龍騎士は、『狩人』の名前まで知っているの？」

「『狩人』自身から名乗ることが多いから、記憶しているだけさ。過去に1度、星龍騎士に仲間だった人物がアイカと接触したことがあったからな。ただ、それだけのことだ」

アイカは油断していたと思い、齒軋りをした。

「王妃・レヴェーニアを殺したのも、犯人はアイカ以外有り得ない。そして、『連』の一部を回収して、アイカは本拠地へ戻ってきた。おれはその事件を、雑誌で知った」

「星龍騎士は、『狩人』の名前をどれだけ知っているの？」

レイスは、『狩人』の名前を告げていった。

「まずは、No.2 二重刀 アイカ・エリランヌ。No.4 麗しの神 リューカ・ミラ。No.12 幻想の死神 ソウマ・ヌベリス。No.15 即死兎 メイ・アイリーン。即死兎 は、以前、星龍騎士によって殺されたのは、アイカも知っているはずだ」

「名前は知っていても、顔とかは覚えていないのかしら？」

「名前だけで、接触したことのある人物の顔は知っている。例えば

幻想の死神 や、 即死兎 の顔は知っている」

「へえ、わかったわ」

アイカは質問を終えて、訓練モードに切り替えた。

「質問は終わりよ。ここからは訓練に切り替わりよ。まずは、一般兵士2人に勝ってみなさい。その2人、レイスの相手をして」
アイカに指名された2人の一般兵士が、レイスの前に立った。

「両者、武器を構えなさい」

レイスは鎌を、一般兵士たちは銃を構えた。

「戦闘、開始ッッ!!」

その合図とともに、レイスは一般兵士たちのもとへ移動した。一般兵士たちは不意打ちされ、身動きが取れなかった。その隙にレイスは鎌を振り上げ、一般兵士たちの身体を刃が切り裂いた。

一般兵士たちは悲鳴を上げ、その場に倒れてしまった。

「勝負ありッッ！」

レイスは溜息をついて、鎌を閉まった。

「す、すごい」

「あれが、星龍騎士」

一般兵士たちの小声が、レイスにも聞こえた。

「ちょ、ちよつとレイス……。一般兵士を一瞬にして撃破するなんて わたしと戦ったときと全然違うじゃない」

動揺を隠せないアイカは、レイスのもとへ行った。

「まさか、わたしと戦っていた時は手加減していたの？」

「手加減などしてはいない。ただ 身体調整の結果が早くも出ただけさ」

「2級の星龍騎士が戦っても苦戦する相手に、1人で……。それも一瞬にして……」

レイスはアイカに向かって、微笑んだ。

「次は……。誰と戦えばいいんだろうな」

アイカは好奇心で満たされていた。今のレイスと戦ってみたい気持ちだが、心の中で溢れていた。その気持ちを抑えるだけで、精一杯だった。

その時だった。

「アイカくん。ちよつといいかな？」

訓練室のドアから、声が聞こえた。アイカが声の主を確認すると、そこにいたのは、

「……………先生」！

『先生』だった。

「アイカくん、ちよつと時間をくれないかな？」

「あ……はい」

アイカは即答して、『先生』のもとへと足を急がせた。

Sc-4・解放されない呪縛、その正体

『先生』の後ろを歩いていつて約2分後。『先生』は、ある部屋の中に入っていた。アイカも、部屋の中に入った。

部屋の正体は、『先生』の書斎だった。綺麗に整頓された机や椅子、本棚も並べられていた。

『先生』は、椅子に座った。

「それで、アイカくん。簡潔に説明すると、キミは今、記憶を失っているようだね。」

何でアイカが記憶を失っていることを『先生』が知っているのか、アイカはそこを不思議に思った。

「はい、そうなんですけど……それが、どうしましたか？」

「一部の記憶喪失　アイカくんは、第1章の被害に遭ってしまったようだね」

「第1章　何のことですか？」

聞き慣れない言葉を言ったので、アイカは尋ねた。

「ボクの計画　『天地計画』の第1章だよ。対象は、星龍騎士。その内容は、星龍騎士を記憶喪失にさせることなんだけど　まさか、アイカくんって星龍騎士の周囲にいたのかな？」

「　そうです。確か、幻想の死神　に星龍騎士の抹殺を薦められて、それで……星龍騎士を抹殺しに任務に行っただんですけど、その星龍騎士の名前が……思い出せないんです」

「やはり、第1章の被害を受けてしまったようだね。しかし、記憶喪失とは言っても、一部の記憶　ボクが『連』を使用した周囲の時間の記憶のみが、消えてしまったようだね」

「　10の秘具　『連』を使用したんですか？」

『先生』は、懷から、金色い輝く杖を取り出した。

「王妃・レヴェーニアが所持していた『連』の一部を、キミが回収してきてくれたおかげで、『天地計画』は実行へと移すことができます」

た」

「あの……、『連』を使用して星龍騎士を記憶喪失にして、『先生』は何をするつもりなんですか？」

アイカは不思議に思ったので、『先生』に聞いた。

「我々 硝子の社は、10の秘具を回収することを目的としている。その理由は何か キミは分かるかい？」

「星龍騎士に対抗するための力をつけるためでしょうか」

アイカなりの意見を述べてみたつもりだったが、『先生』は首を横に振った。

「この国を支配するためだけにある10の秘具は、圧倒的な力を持つ。神の存在を『在る』と信じる星龍騎士は、当然、神の贈り物である10の秘具は、持ち主である神に返還するべきだと考えているんだろう。しかし、我々は10の秘具を利用して、世界を元に戻すのだよ」

「世界を元に戻す。……それは、どういう意味なのでしょうか」

『先生』は、溜息を1つ吐いてから、語り始めた。

「この世界は、昔 神が地上へと贈った10の秘具を利用して、それぞれの地方を支配していった。その支配力はすざましい勢いで増していき、お互いに力を求めて、争いが起きた。その争いの中で、負けたくないと思った連中は10の秘具を隠し場所へと隠した。敵には見つからないような場所に。そして、争いは終結した。地方で分裂していた世界は1つのまとまって 今の世界があるわけだ」

「その話が、今回の計画とどういう関連性があるんですか？」

「現在、地上に暮らしている連中は、油断しすぎている。いつ、何処で死んでしまってもおかしくないこの時代に、それなのに

油断してしまっているんだよ。それを思い知らせて、世界を元に戻すのが、ボクが考える『天地計画』だよ」

「つまり、現在の人間たちを試そうとしているわけなんですか？」

「結論を言えば、そういうことになるね」

アイカは、単刀直入に感じたことを口にした。

「わたしは……力を求めています。何のために力を求めているのか、わたしのことなのに　何も分かりません。理由なんて、ないんです。なのに、力を求めている。わたしはどうして　硝子の社にいるのか、どうして今、戦っているのか、刀を握っているのか　何も、分からなくなってきました」

アイカは苦しみ、悶えながら　『先生』に告げた。

「わたしはいつたい、誰なんでしょう。『先生』に操られるだけの人形でしょうか？邪魔なものは始末するだけの人形でしょうか？わたし、　硝子の社　に入る前の記憶まで　忘れてしまったようなんです」

「……」

『先生』は、驚愕した。椅子から立ち上がり、アイカの眼前に移動した。

そして、『先生』は告げた。

「どうしても　思い出したい記憶？解放されたい呪縛？ならば、ボクの手によって思い出させてあげる。キミに覚悟ができていて、後悔したりしないならね」

「　え」

どうして『先生』がアイカの過去を知っているのか。覚悟、後悔……。まるで、それは　。

「そう。ボクがキミ　アイカ・エリランヌの過去を消した。過去を呪縛に変えた」

「　　嘘」

信じられない真実がアイカに明かされ、アイカは驚愕していた。

「『先生』が、呪縛にした？　わたしの記憶を？　そんな　　」

「でも、　硝子の社　以前の記憶をなくしたことを、よく思い出せたね。普通、気付かないことだよ。褒めてあげる」

アイカは膝を床についた。何が何だか、記憶があやふやになってきている。何も　分からなくなっている。

そんなアイカを、『先生』は抱きしめた。

「え？」

「でも、今のキミには必要ないことだから　　ボクは呪縛を解かない。『天地計画』が成功したら、解いてあげる」

その言葉が、アイカを更に苦しめた。

アイカの帰りが遅いので、レイスは訓練室を出た。

「どうしたんだろうな、アイカ。『先生』とか呼ばれる奴に呼び出されたみたいだけど……そんなの、どうでもいいか」

そんな独り言を呟きつつ、レイスは最初にベッドで寝ていた部屋へと戻った。

アイカは、『先生』の書斎から出た。

「レイス。もう、訓練室から出ちゃったかな。あれから随分時間が経過しているし、諦めているかもしれないわね」

アイカは、レイスが今何処にいるだろう、と推測を始めた。

「訓練を終えたのならば、レイスの個室にいるのかもしれないわね」
そう考えたアイカは、レイスの個室へと足を進ませた。

アイカの推測は見事に的中した。

レイスの個室に入った途端、視界に入ったのは、ベッドに身体を倒しているレイスのすがただった。ドアが開いた瞬間、ドアの音に気づいたのか、目を覚ましてしまったらしい。

「あ、ごめん。アイカ。もう訓練、終わったかと思ったから」

「別に……わたしも、今やっと話が終わったから。それに、あれで訓練は一応終わりだったから」

レイスは身体を起こした。

「そういえば、レイス。『先生』がレイスのことを呼んでいたよ。わたしが『先生』のいる場所までついていってあげるから」

「その『先生』で、何なんだ？」

「『先生』は、わたしたち 硝子の社 のボスよ。全てを仕切っているの。もちろん、『狩人』の1人よ。だけど、本名は分からないから、みんなは『先生』て呼んでいるけれどね」

「そんなお偉いさんが、おれに用なのか？」

アイカは頷き、ドアを開けた。アイカは部屋を出た。しょうがないので、レイスも部屋を出た。

アイカについていて、アイカはようやくドアを前にして止まった。

「ここが『先生』の書斎。ここから先はレイスだけで進んで」

「え、アイカは行かないのか？」

「わたしには用がないもの。それに、他人の用には興味がないからレイスはドアを開き、書斎の中へと入った。

「いらつしゃい、レイス・ネフィリーくん。ボクのことば、『先生』とでも呼んでね」

「あ、はい……」

『先生』は、椅子に座っていた。

「それで、レイスくん。今日はいい報せをしてあげようと思ってね」

「いい……報せ、ですか」

『先生』は微笑んで、言った。

「レイスくん、ボクの考えてる『天地計画』に協力してほしいんだ。だけどね、『天地計画』は『狩人』以外には知らない極秘計画でね、それでもボクはレイスくんには協力してほしいんだ」

レイスは、驚愕した。

「それじゃあ、まるでおれが『狩人』になつてくれって言っているみたいに聞こえる……」

「お察しの通りだよ、レイスくん」

『先生』は間をおいて、レイスに告げた。

「これより、『狩人』候補のレイス・ネフィリーを、『狩人』No. 17 呪縛の鎌 レイス・ネフィリーとする！」

「え」

レイスは『先生』に向かつて、言った。

「そ、それってどういう意味で」

「アイカくんの報告によると、レイスくんは今日の訓練で、一般兵士2人に対して一瞬で撃破したそうじゃない。それなら、『狩人』になれる要素はあるよ。充分過ぎるほどにね」

「い、いや……。今日 硝子の社 に入っただけで、早くも『狩人』に昇進で、早すぎる話だと思う……」

レイスは戸惑っていた。しかし、『先生』は言った。

「『天地計画』を成功させる為に、必要なピースを集めただけさ。ということで、レイスくん。今度からは任務に励んでもらいたいんだけど」

「わかった」

レイスは、瞳を閉じて了承した。

「硝子の社の『狩人』No. 17 呪縛の鎌 レイス・ネフィリー。『狩人』の名に恥じないよう、全力で任務に取り組むことを誓う
！！」

そして、レイスは『狩人』へと昇進した。

Sc - 6・呪縛 解除

アイカは、『先生』の書斎の前で、レイスが帰ってくるのを待っていた。

「わたしは……誰なんだろう？ でも、何でいきなりそう思い始めるようになったんだろう」

『先生』から言われた言葉。疑いたい真実。真実がもし本当ならば、アイカは運命に抗いたいと思う。

「そんなわけがない。先生が、そんなわけ……」

その時、アイカの脳裏で、何かが徐々に割れる音が響いた。

脳裏に描かれる、1人の少年と幼き頃のアイカのすがた。

「……」

気がつけば、アイカは両手で頭を抱えていた。

「嘘だ、嘘だ……」

脳裏に描かれた2人の人間のすがたが浮かんだアイカは、小さく呟いた。

そして、今度は 叫んだ。

「嘘だあああああああつつつつつ……！！！！！！！！！！」

運命に抗いたいと願ってたアイカは、自分の無力を改めて知って、現実を見た。

レイスが、『先生』の書斎から出てきた。

「あ、レイス……。どうだった？」

「おれ、『狩人』に昇進した」

レイスが、無表情でアイカに言った。

「No.17 呪縛の鎌 レイス・ネフィリー。『先生』は、おれにそう言った」

「そ、そうなの。……すごいじゃない」

呪縛。

アイカの脳裏に、この言葉が浮かんだ。

「解放されたい呪縛？」

「過去を呪縛に変えた」

「今もキミには必要ないことだから

ボクは呪縛を解かない」

『先生』が先程、アイカに囁いた言葉を思い出した。

アイカの呼吸が、荒くなっていた。

「呪縛を解かないって言ったのに 何で、今……！！」

アイカが、走り出した。

「お、おい！ アイカ……！」

レイスは、アイカを追いかけ始めた。

『先生』の書斎にて、『先生』は2人の会話を聞いていた。

そして、『連』を床に落とし、口元を緩ませた。

あの頃は、楽しかった。

隣には……あの人がいてくれたから。だから、毎日が輝いていた

の。

なのに、争いが始まって……あの人と会える日々は減っていった。

それは、どうしてなの？ と、疑いたくなった。

運命に抗えるものなら、抗いたと思った。

けれど、抗うことはできず、運命通りに進み始めたの。

その時だった。

差し出されたその腕が　　。

わたしを闇へと引っ張った。

「アイカ。……ねえ、アイカ!」

「うん? あ、お兄ちゃん!」

「今日は釣りでもしない?」

「うん……。今日、わたしは……。えとえと、お兄ちゃんと稽古したいな」

「何で稽古なんかしたがるんだ?」

「わたし、強くなったから。だから……。ね?」

「男のおれが、女のアイカに負けるわけがないだろ?」

「あ、また女って馬鹿にした! もうわかった!! お兄ちゃんなんか、コテンパンのギッタギタにしてやるんだからあつ!」

「お、やれるものならやってみろ」

そう……。お兄ちゃんと共に過ごしたあの日々は輝いていた。誰にも邪魔されなかったのに。

なのに　　邪魔されてしまった。

国が武力を求めて、弱い国へと侵略を始めた。

それが、「戦争」へと続く序章だった。

わたしはお兄ちゃんと、避難しようと思っていた。

なのに、お兄ちゃんは戦場へと向かってしまうことになった。

お兄ちゃんは、わたしに1つの約束をした。

泣きじゃくるわたしに向かって、別れを惜しむわたしに お

兄ちゃんは、微笑んで告げた。

「アイカ。おれは、絶対に帰ってくるよ。そしたら……また一緒に
いような。例えば形が違ったとしても」

お兄ちゃんの微笑んでいる表情が、更にわたしを苦しくさせた。

お兄ちゃんはわたしに背中を向けて、空に吸い込まれるようにし
て わたしのもとから離れていった。

けれど、何年待っても 「お兄ちゃん」は帰ってくることな
どなかった。

それから何年経過した後だったかな……わたしの住んでいた村が

廃村となってしまうて、新たな町へと引越そうとしていたわたしを引張ったのは。

お兄ちゃんが帰ってこないの、心が悲しくなっていた。大分、心は腐っていった。

両親と共に町へ引越す途中、敵国の兵士が待ち構えていた。目の前に町があったのに……。

父親は、母親とわたしをかばい、囨になった。母親とわたしは、躊躇いながらも町へと向かった。

けれど、兵士の数は多かった。

その時 父親と母親が、わたしの眼前で 倒れた。血を流しながら、倒れていた。

言葉が出なかった。

ただ、どこかで何かが割れる音が響いただけだった。

呆然としているわたしに、誰かが声をかけた。

「居場所がほしいかい？」

そこにいたのは、白衣を身に纏う 1人の少年だった。

「ボクがキミの居場所を作ってあげる。迷わないで。ボクのもとへ来ない？」

それが、わたしの人生の分岐点だった。

不覚にも、わたしの脳裏ではある1人の少年のすがたが浮かんでいた。

「おれは、絶対に帰ってくるよ。例え形が違っていたとしても」

「お兄ちゃん……？」

無意識の中で、わたしはそう呟いた。

S c - p 2・嘘だと信じたい

居場所を失ったわたしを闇へと引つ張った1人の少年のことを、
わたしは 「お兄ちゃん」だと勘違いした。

「ボクは、キミの兄じゃないよ。初対面でしょ？ 初めまして、だよ」

少年は、わたしに向かって微笑んだ。

微笑む表情まで、「お兄ちゃん」にそっくり いや、同じだった。

「……そ、……だよ」

「え？」

「嘘だよ。お兄ちゃんには双子なんていなかった！ この世の中で、こんなにお兄ちゃんに似ている人なんていないっ！ だって……あなたがお兄ちゃんなんだよね？」

「世界の中で、自分に似ている人なんて2、3人いるのが当然のことだよ。キミに関わりがあるそのお兄ちゃんは、そんなにボクに似ているんだね」

わたしは、悲しくなった。

そして、怒りを爆発させた。

「わたしを騙そうとしないでよっ！」

少年はわたしの怒声に驚愕した。

「声も似ているなんて　そこまで有り得ないよっ！　それに……お兄ちゃんは、わたしに約束したっ！　わたしはずっと、お兄ちゃんと交わした約束だけは忘れなかったっ！！」

気がつけば、わたしは泣いていた。

「形が違っていたとしても　お兄ちゃんは、帰ってきてくれると　そう約束したこと、わたしは覚えてる！　お兄ちゃんは……約束を、忘れちゃったの？」

「　忘れてなんかいない」

その声は、お兄ちゃんそのものだった。

「アイカとの約束、その為だけに戦場を抜け出して……再び、アイカの笑顔が見たくて……戻ってきた」

「……お兄ちゃん……」

やっと、少年はお兄ちゃんだと自覚してくれた。

「けど、もう　お兄ちゃんには戻ることなんてできない」

お兄ちゃんは、杖を取り出した。後に『連』と呼ばれる　10の秘具の1つだった。

杖先を、わたしの顔面に向けた。

「お兄ちゃん……？」

わたしは戸惑った。

そして一瞬だけ悟った。わたしが、わたしではなくなってしまうのかもしれないと。

「ごめん、アイカ。そして、さようなら」

涙声になって呟くお兄ちゃんの声に耳にしたわたしは、

次の瞬間、記憶が吹き飛ばされた。「呪縛」と化してしまった。

「……あなたは？」

「ボクは 硝子の社 『狩人』 No. 1。『先生』と呼んでくれるかな？」

「あ、うん……」

「キミ、居場所がないでしょう？ だから、ボクのところに来ない？ 居場所がないよりは、マシだと思うよ」

そして、闇へと引つ張られた。

Sc - 7・信じてもいいよね

「はぁ……はぁ、はぁ……」

アイカは、本拠地の最上階にて1度、足を止めた。ずっと走ってきたせいか、体力をかなり削ったアイカは、呼吸が荒くなっていた。

足を止めたアイカは、呼吸を整えることにする。

「はぁ……そ、そんなこと……有り得るはずがない……」

アイカの呪縛が放たれてしまった今、明かされてしまった驚愕の真実に、アイカはただ疑うことしかできなかった。

「『先生』が、お兄ちゃんだなんて　そんなこと、有り得るわけがない」

「『先生』が、お兄ちゃん？」

アイカの後方で、声が聞こえた。

「!？」

アイカは後方を振り向いた。そこには、アイカを追いかけてきたと思われるレイスのすがたがあった。

「レ、レイス……」

「さっきアイカが言ったこと、本当なのか？『先生』が、アイカの兄だってこと」

レイスの表情は真面目だった。そのことぐらい、アイカもわかった。

しかし。

「レイスには関係のないことだよ。わたし自身も問題だし、レイスは『狩人』になった責任感を持てばいいだけのことだから」

「今はおれが『狩人』に昇進したことは、関係のない話だろ」

アイカは、レイスに背中を向けた。

「封じられた記憶が放たただけなの。ただそれだけ。……何も問題なんてないから」

「　　嘘だろ」

レイスが、アイカにそう言った。

「え？」

アイカは、レイスを見た。レイスがアイカのもとへ近づいてきた。確かに、アイカが驚愕するほど明かされてしまった記憶など、おれには全くの関係がない。だけど、それが原因でアイカがアイカでなくなってしまうとしたら、話は別だ」

「……………」

「おれはもう、星龍騎士だったレイスじゃない。今は『狩人』の1人だ。アイカの仲間だ。仲間はおれのサポート対象にある」

「…………何、言ってるの？別に、わたしがわたしじゃなくなる程、そんな大したことじゃない」

「でも、『先生』が兄ならば、それは驚愕の真実じゃないのか？」

「…………っ!!」

アイカはレイスから逃げようとした。けれど、レイスの言葉がアイカの足を止める。

「そうやって　　真実から逃げようとするんだな」

アイカの視界が歪んでいた。

「嫌。もう、『先生』に会えるわけがない。どんな顔して会えばいいのか…………わたしにはわかんないよ……………」

その時、アイカの両肩に、レイスの両手が置かれた。

「……………!!」

恥ずかしいせいか、アイカはレイスの顔を見ることなどできなかった。しかし、レイスは言葉を続けた。

「今はそのままでもいいから、聞いてほしい。おれは アイカの過去を知りたい」

「え」

「抵抗があるのなら、別に構わない。けれど、おれはそう思っているという気持ちだけわかってほしいだけだ」

レイスは、両手をアイカの両肩から離して、アイカに背中を向けた。

「気持ち整理できたなら、一緒に任務をやっていいかな」
そしてレイスが走り出そうとした、その時だった。

「いいよ。わたしの過去、レイスに教えても」

レイスの足が止まった。

「レイスになら、教えてもいいと思う。わたし、レイスは信じてもいいって思うから」

「それ、本当か？」

レイスが、アイカを見た。アイカは頷いた。

「その場でいいから、わたしの過去 聞いてほしい」
そして、アイカは語り始めた。

S c - r ・ わたしだけだった？

わたしの隣には、いつだってお兄ちゃんがいた。

わたしがお兄ちゃんを見つめれば、お兄ちゃんは笑ってわたしを見つめてくれる。

お兄ちゃんが隣にいただけで、わたしは幸せだと感じることもができた。

お兄ちゃんは、剣を扱うのが上手だった。

将来は国を守るために頑張るのだ、と自身からわたしにそんな夢を語ってくれたことがあった。

お兄ちゃんが毎日決まった時間に行う稽古は、わたしに幸せなひとときを与えた。

気がつけば、わたしも夢を抱いていた。

「お兄ちゃんみたいに、強くなりたい」と。

わたしもお兄ちゃんと一緒に、稽古を始めた。

いつもお兄ちゃんには敵うことなどなかったけれど、だけど……楽しかった。

楽しかったのに、幸せな時は崩れた。崩されてしまったんだ。

それは、国が力を求めて弱い国へと侵略を始めた時から始まっていた。

わたしはその時、お兄ちゃんと笑ってた。いつものように、稽古をしていた。

その時だった。村のみんなが、避難を始めたのは。

空は、赤く染まっていた。戦闘飛行船が、爆弾を落とした。

一瞬にして、村は虚しいすがたへと、変貌した。

家族みんなで避難していた時、わたしは心の中であることを思った。

「どうして争わなければいけない。幸せな時間が崩されなければいけない」と。

その疑問に答えてくれる人物など、誰もいなかった。

村長さんの意見で、村のみんなは安全な町へと引越すことを決めた。

わたしの家族は、町へと引越そうとしていた。

町が眼前にあったその時、狙ったタイミングで敵国の兵士が家族を襲った。

「お前たちは先に行けっ！ オレは後で追いかける！」

兵士を挑発したお父さんは、わたしたちを一刻も早く町へと向かわせようとした。

お父さんに謝って、わたしたちは町へと向かった。

しかし、兵士の数は多かった。

今度は、お母さんが囹となった。

残されたのは、わたしだけだった。

わたし……だけ……。

わたしだけ……だった？

町へと逃げようとしたのは

わたしだけだった？

SC - 8・決意 対決

「……アイカ？」

いきなりアイカが、口を閉じたので、レイスはアイカに声をかけた。

「おい、アイカ」

レイスがどれだけ声をかけても、アイカは視線を動かさないままだった。

それでもレイスは、アイカに声をかけた。

「アイカ？」

「あ、レイス……」

ようやくアイカがレイスの声に反応した。

「どうしたんだよ、アイカ。何かぼーっとしていたぞ」

「うん。何か記憶が曖昧になってきて……。確か、戦争のときに逃げたのは、わたしだけだったのか、それともお兄ちゃんも一緒に逃げたのか。それを忘れただけなの。でも……お兄ちゃんもわたしたちと一緒に逃げたはず……？」

アイカが首を捻った。

「でも……わたしがここにいるのは、お兄ちゃんが 硝子の社を作ったから……。それだけは、間違えるはずがない真実……」

アイカが自問を始めた時、突如レイスは、バイブレーションを感じた。ポケットに入れておいた、『先生』から貰った携帯電話機だ。アイカも、携帯電話機を取り出した。

「はい、どうしたの？」

アイカが応答に出たが、レイスも一応出ることにした。

返答は、意外なものだった。

「全『狩人』の者に告げる！ ガーネクス内に侵入者を発見！ 兵士は撃退されている模様。直ちに、侵入者を抹殺せよ」

その声は、『先生』からのものだった。

「あと、二重刀は侵入者を撃退された後、ボクの書斎へ来ることに」

「え？」

そして、通信は切れた。

レイスは、アイカを見た。アイカは、驚いていた。

「お兄ちゃん……」

「『先生』の言葉が気になるのはわかるけどさ……今は、侵入者を抹殺することだけを考えよう」

レイスがそう言うと、アイカは頷いた。

「そうだね」

アイカとレイスは、屋上で侵入者が来るのを待った。

そして、侵入者はやってきた。

相手は、兵士を撃退してきた者だ。呼吸困難になっているのを、息が荒れていることから分かった。

「はぁ……はぁ……。だ、誰か……いるんでしょう？ あたしを倒しに来たのなら……速やかにすがたを現わすべきだと思うよっ！」
相手は、通常の戦力より劣っていることは間違いないはずだ。レイスは心の中でそう思った。

しかし、相手の声を聞いて　レイスは、驚愕した。

「そのすがたを見て、あなたが後悔するのを覚悟して？」

レイスの頭上で、アイカが敵の質問に答え、すがたを現した。侵入者は、レイスが何処にいるのか、まだ分からないはずだ。

「あなた……誰？」

侵入者は、アイカのすがたを見てそう言った。アイカは正体を明

かした。

「もちろん。硝子の社の者よ。『狩人』No.2 二重刀 アイカ・エリランよ。あなたのことは、知っている。星龍騎士2級、エリール・クリスファア！。棒術具を自由に操るそうね」

アイカは侵入者 エリールの名を呼んだ。

「あなたが、レイスを監禁していた『狩人』ね？」

アイカが地上へと着地したのを、レイスは確認した。

「監禁している？ 人聞きが悪いわね。監禁しているわけがないでしょう？ 訓練の相手をしてあげているのよ」

「！？」

エリールが驚愕した。アイカは口元を緩めた。

「そして、彼は とても強くなったわ」

「もうそろそろ……出番か」

レイスは小さく、低く呟いた。

「これから、ショータイムと行こうかしら？」

彼女との対決よ、

出現なさい

『狩人』No.17 呪縛の鎌

レイス・ネフィ

リー！！」

アイカが、レイスの名を口にした。

そして、アイカが消えた代わりに、レイスがエリールの前にすがたを現した。

眼前にいるのは、星龍騎士の聖服に身を包む、エリールの驚愕した表情を浮かべるすがただった。

「約束、したのに」

レイスは、エリールと交わした約束を思い出していた。

「駄目だよ……そんなの……。あたし、レイスが敵になっちゃうの……嫌だよ」

「絶対に許さないからねっ！レイスが硝子の社に入るとか……そんなの、絶対に許さないっ！だって 好きな人を、傷つけ

たくはないから」

「あたしが、レイスを助ける。だから、待っていて」

エリールの言葉を、レイスは忘れてはいなかった。

エリールの瞳に涙が溢れていることを、レイスは見た。

「だけど、星龍騎士として裏切り者は、倒す」

エリールは、レイスを標的と定めたようだ。

「あたしはキミのことをずっと……信じていたよ！　だけど
キミは信じてくれなかったんだっ……！」

エリールの叫び声が、レイスの心に刺さる。

しかし、この苦しみはあと少しで終わるのだ、と　レイスは、
心の中で言い聞かせた。

レイスは、瞳を閉じた。そして、瞳を開けて　鎌を握った。

「レイスがその気なら　あたしも、これでハッキリとけじめを
つけるから」

エリールは、溢れだした涙が流れたことを確認して、微笑んだ。
そして、殺意の瞳でレイスを見つめて　レイスのもとへ走っ
た。

Sc-9・その時まで、信じてるから

エリールが、棒術具を振り上げた。

「はあああああつつつ!!」

エリールが棒術具を振り下ろした。レイスは鎌の刃で棒術具を受け止め、跳ね返した。その反動は、すざましいものだった。

「あうつ!!」

簡単に跳ね返されてしまったエリールは、なんとか地上に着地した。

「やっぱり……あの頃のレイスは、いなくなっちゃったね」

エリールがそう呟いた。

「おれは、硝子の社『狩人』No.17 呪縛の鎌 レイス・ネフィリーだ。星龍騎士だったレイスなんてもういない。だから エリールのいう言葉は、正しい」

「うん、そうだね」

エリールは立ち上がり、レイスを見つめた。

「だけど、1つだけ教えてほしい。 どうして、硝子の社に身を投じるようになったの？」

「え……」

エリールの表情は真剣だった。そのエリールの疑問に、レイスは戸惑う。

「おれが、硝子の社に入った理由……」

それは、本拠地から脱出する可能性が低かったから？ だから、仲間のフリをした？

アイカの気持ちを裏切つて？エリールと共に、また星龍騎士として戦いたかったから？

しかし、硝子の社 本拠地を壊滅任務で、レイスは星龍騎士を辞めようと決意していた。

それでも、レイスはエリールを信じていたかったのか？それとも、

アイカみたいに強くなろうとしたから？

考えれば、いくらでも答えは出てきた。

「入った理由……？」

「あたしの気持ちを裏切ってまで、敵になろうとしたの？」

その答えは、1つだけだった。

「エリールに……会いたかったから」

「……」

エリールは驚愕した。

「例え敵になったとしても、おれがアイカの手によって殺されたらアイカは、今よりもっと悲しむことになる。それを少しでも軽減したかったからだ」

エリールは棒術具を落とし、涙を流していた。

「だから、また会えて　おれは、嬉しい」

「　あたしも。あたしも、嬉しい……」

レイスは鎌を床に落として、エリールのもとへ向かった。

「うぐっ……、レイス……」

エリールの顔は、涙で濡れていた。

「おれは、星龍騎士に戻るつもりはない。だけど、エリールの仲間でいたい気持ちは本当だから。だから　その時が来るまでの時間、我慢していてほしいんだ」

「……まだ、『狩人』のフリを……続けるの？」

「いきなり脱出するのは難しい。でも、兵士は大分撃退されているのは確実だ。おれも訓練を積んで、星龍騎士の時よりは強くなることのできた」

エリールは笑った。

「うん、あたし……その時が来るまで　レイスを信じる。でも

……今から、脱出するのは駄目かなあ？」

レイスは頷いた。

「ど、どうして……？」

「今は、『先生』と言われる 硝子の社 ボスがこの中にいる。相当の実力の持ち主だと、おれは思っている。それに、『狩人』も中にいる。こんな状況での脱出は無茶だ。だから、近日 おれは、架空の襲撃をしかける」

「え？」

「嘘の襲撃さ。詳細は、通信機を通じてエリールに伝える。成功することができれば、おれは脱出することができる。けれど、それには……多少の戦闘力が必要なんだ。エリール……みんなに手伝ってもらえることができるか？」

エリールは少し考えてから、頷いた。

「きつと、みんなはまだレイスの帰りを待ってる。例え、敵だとしても、敵じゃなくなっただなら……みんなは、レイスを迎え入れてくれる。だから、大丈夫だよ」

エリールは笑った。レイスも口元を緩ませた。

「だから、エリールはこのままみんなに伝えてほしい。おれからの通信があるその日まで、通常の行動。お願いだ」

「うん、わかった」

そして、エリールは術具を取り出して、その場で消えた。

「さてと……戻るとしようか」

レイスが戻ろうとしたその時

「レイス」

「え？」

レイスの眼前にアイカがいた。

「侵入者は、ちゃんと倒せた？」

「いや、逃げられた」

「そう」

アイカの何かがおかしい、とレイスは察した。

普通、敵を逃したら何かしら罰が与えられるものだと思っていたが
アイカは、何事もなかったかのように言った。

そして、アイカの瞳は

冷静で殺意を秘めていた。

Sc-10・辿り着く先は、結局同じなのに

個室へと戻ったレイスは、「架空の襲撃」について色々と手段を練っていた。

そして、レイスは通信機を取り出した。

「もしもし？ レイス？」

相手はエリールだった。

「意外と早いね。もう考えたの？」

「エリールと話している時から色々考えていたんだ。それを再確認、修正しただけだからそんなに時間はいらなかった」

「そうだったんだ。じゃあ、ちよつと待っててね。みんなの通信機にも接続するから」

エリールは一旦通信を切った。

レイスは、作戦の手段を再確認していた。

その時、バイブレーションを感じた。レイスは応答する。

「レイス。エリールだよ。じゃ、今からみんなに接続するからよろしくね」

スピーカーから、何かスイッチを押したかのような音が響いた。

レイスは、深呼吸をして 話し始めた。

「おれは、硝子の社『狩人』No.17 呪縛の鎌 レイス・ネフィリーだ。……みんな、久しぶり。最後の戦いとなったあれから、どれだけの月日が経過しただろう。エリールから聞いていると思うが、おれは硝子の社の『狩人』になった。だが、おれはみんなにもとに帰りたい。……わがままだと思うかもしれないが、おれの作戦に協力してくれ」

レイスは、作戦の手段を細かく記した紙を用意して、告げた。

「只今から、レイス・ネフィリーによる『架空の襲撃』の作戦につ

いて述べる。まず、みんなの中から陽動班を作ってもらいたい。戦闘能力が高い2級以下の者が適していると思う。人数は、10数人いれば足りると思う。しかし、騒ぎにならない程度にしてもらいたい」

レイスは紙を裏返した。

「陽動班は、硝子の社 本拠地・ガーネクス付近で敵の注意を引きつけてほしい。見張りの兵士なら、すぐに気づくと思う。その兵士を倒してほしい。倒せば、本拠地内が緊急事態モードに切り替わる。緊急事態モードに切り替われば、『狩人』の者は、兵士が倒された場所まで移動する。数秒で到着するに違いない。その『狩人』の相手をしてくれ。聖龍騎士が10数人集まった程度で倒せるような相手じゃない。そうやって陽動している間に、おれは本拠地を脱出する」

レイスは2枚目へと紙を変える。

「おれは本拠地の裏側に脱出する。裏側には、エリールが待機していてほしい。おれが、エリールと合流することができれば、陽動班に合図を送る。通信機のバイブレーションだ。それで、陽動班の者は、『狩人』の者の前からレポートしてほしい。おれは、エリールと共に行動する」

そして、レイスは紙を置いた。

「これが、おれの考える『架空の襲撃』だ。陽動班は、そちらで作ってもらいたい。なるべく上級者を集めてもらえると、おれは助かる。あと、実行時間は、今日の夜。なるべく、この作戦で犠牲者を出したくない。みんなの協力を……お願いしたいんだ」

レイスが説明を終えると、スピーカーから返事が来た。

「了解!!」

星龍騎士のみんなの声だった。レイスは、懐かしいと感じた。

「みんな、ありがとう」

レイスはそう呟いて、通信を切った。

「夜まで待てばいい。そうすれば、おれはまたあの場所へと戻ることができるのだから……」

だから、あと少しの我慢だと、レイスは心の中で言い聞かせていた。

そして、実行する時間はやってきた。

外は暗闇で満たされていた。レイスは、通信が来るのを確認していた。

レイスは、みんなとまた会えることを願っていた。

その時、バイブレーションを感じた。

「レイスか？　こちら、陽動班リーダーになってしまった星龍騎士初級のオウカだ。これから、よろしく」

スピーカーから、声が聞こえる。相手は、レイスが聖龍騎士だった頃のパートナーのオウカだった。

「只今、本拠地から数メートル付近。いつでも実行することはできるぞ。負ける自信は全くない！　いつでも始めてくれ」

「ありがとう、オウカ」

レイスは礼を述べて、告げた。

「只今から、『架空の襲撃』作戦を実行する！　陽動班は行動を始めてくれ」

「了解ッ！！」

オウカの声が響き、通信が切れた。

「あとは、緊急事態になるだけか……」

レイスは個室の窓から、見張りの兵士が動いているかを確認した。見張りの兵士が消えて、数メートル前方した場所で戦闘が始まっているのを、レイスは確認した。

そして、見張りの兵士2人が 倒れた。

「緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 兵士2名の戦闘不能が確認。攻撃による戦闘不能、直ちに敵を抹殺せよ」

「始まったか」

レイスは、緊急事態モードに切り替わったのを確認した。窓をのぞくと、早くも 幻想の死神 ソウマが、陽動班の相手をしていた。陽動班も苦戦を強いられているようだ。レイスは一刻も早い脱出を実行した。

個室から脱出した。途中で兵士とすれ違ったが、特に気にしなかった。

裏側に通じる窓の下には、エリールのすがたがあった。レイスは覚悟を決めて、窓から飛び降りた。

「レイス ツッ!!」

エリールの叫び声が聞こえた。

レイスは、エリールから数センチ離れた場所に着地した。

「レイス……。大丈夫？」

「ああ、問題はない。後は陽動班に連絡するだけだ」

レイスは立ち上がり、身なりを整えた。

通信機を取り出し、バイブレーションを鳴らした。

「これで安心だな。よし、エリール。逃げるぞ」

「うん」

そして、エリールと逃げだそうと思った……。その時だった。

「呪縛の鎌 レイス・ネフィリー。 見つけた」

上空から、声が聞こえた。レイスは見上げた。

そこには、窓から見下すアイカがいた。

「!? なんて、おれたちがここにいるのを分かっていたんだ!？」

「『狩人』の者は全て知っているわよ。レイスが逃亡しようとしていたことなんて」

「なっ……」

アイカは窓から飛び降りた。

「『先生』は最初から知っていた。聖龍騎士と協力して、脱出しようとしたことも全て。この場所で彼女と合流しようとしていたことも全て。陽動したのも、レイスでしょう？」

アイカの瞳は、やはり冷酷で殺意を秘めていた。

「ということだね、レイスには帰ってもらわれたら困るの。『先生』から指名されたこの命令 絶対に従ってもらっ」

アイカは刀を構え、叫んだ。

「硝子の社へ戻りなさい、レイス・ネフィリー。従わなければ、エリール・クリスファアを抹殺する」

「!？」

レイスもエリールも驚愕した。

「エリールは関係ないだろ!? それに、何でそんな……」

「『先生』の考える計画に、レイスは必要不可欠な存在。だから、それを妨害する者は抹殺するのみ」

「……くそっ!」

レイスは考えた。

「最初から言っているでしょう? 脱出は不可能。レイスが硝子の社へ戻るのならば、エリールを殺したりはしない。しかし、逆らうならエリールを抹殺。早く選びなさい。結局、どちらを選んでも、未来は同じなことに変わりはないのだけれど……」

「え」

アイカの言った言葉が、意味不明だった。

「選択肢があるのに、結局未来は同じって どういう意味だよ」

「結局は、レイスは 硝子の社 に戻ることになり、エリールは殺される。その運命に変わりなど何もない」

「!!」

レイスはただ、運命に抗えない自分自身に 呆れていた。

Sc-11・偽りのアイカ・エリランヌ

レイスは、ただ呆れていた。

隣にいるエリールの表情を見ると、エリールは何故かに満ちた表情をしていた。怒り

「さあ、どちらにするの？」

アイカが、レイスたちに決断を迫らせる。

その時、エリールが口を動かした。

「あなた、二重刀 アイカ・エリランヌじゃないでしょ」

「は？」

アイカとレイスが、エリールを見つめた。エリールは、真剣な眼差しでアイカを見つめた。

「何を言っているの？ わたしは 硝子の社の『狩人』No.2

二重刀 アイカ・エリランヌ。そのことに変わりなど何もない」

「嘘よ」

それでも、エリールはキツパリと断言した。

「証拠は何？」

「何故かやつと 今、思いだすことができたわ。 あたし

は1度、あなたに会ったことがあるわ。そして、戦ったこともある。そこであなたは言った」

「え？」

「確か あたしは、レイスを渡さないって言った。そうしたら、あなたはこう告げたの」

アイカが眉間に皺を寄せた。

「例え現実性がなくても、あなたは言った。『じゃあ、実際にやって見せなさい』と」

「！！」

アイカは驚愕の表情を見せた。

「どうして　そのことを思い出して　」

「何で思い出したのかはわからない。けれど　あなたの言っていることは、おかしいよ」

エリールは、悲しい表情を見せた。

「あなたは、全力で邪魔するって言った。けれど、命を奪うことまではしないはずだよ」

アイカの表情が、厳しいものになった。

「普通だったら、正々堂々と勝負するはずだよ。だけど、あたしを抹殺するんでしょ？　じゃあ、あなたはあたしの知っているアイカ・エリラン又じゃないはずだよ」

エリールは言い切ったような表情を見せた。

ただ、レイスは驚愕の繰り返しだった。

「フツ……」

アイカが口元を緩めた。

「そんな理由で、アイカの正体を見破ろうとするなんてね」

「！！」

アイカの口調が変わった。

「レイス。あれはきつと、10の秘具の1つ『変』を使用したんだと思う。確か、硝子の社は『変』を所持していたはず。なら、正体は　」

「硝子の社のボス　『先生』かつ！！」

レイスとエリールの考えの先の結果が出た。

「ハハハハ……アハハハハハハッ！」

アイカが腹を抱えて笑い始めた。

「よくわかったね、呪縛の鎌と星龍騎士2級エリール・クリスファー。確かに、操作しているのはボクだよ。『変』を使用しているのも事実だ。よくわかったね」

ついに、アイカの口調が完全に変わった。

「何で……『変』なんか使用して、アイカを乗っ取っているんだよ」
「ボクは最初からキミがここから脱走することは分かっていたよ。」

いずれはその日が来ると思ってた。仲間を裏切りたくはない、と思いたくなるだろうからね」

「それが、アイカの乗っ取りと関係があるんだよ」

「本当は、キミをこっちへ戻してからアイカと話すつもりだったけど、変わった。まさか、『天地計画』第1章が失敗に終わると思っていなかったからね」

レイスとエリールは戸惑った。

「『天地計画』第1章……？」

「ボクがこの計画を成功させる為には、キミの能力が必要なんだよね。けれどなあ　　星龍騎士が記憶を思い出すとは、信じられない話だ」

エリールがぴくん、と反応した。

「あたしの記憶がなくなったのは、アンタのせいだったの？」

エリールがアイカを睨みつけた。

「10の秘具の1つ　対象の記憶を操作することができる杖『連』。神話に出現する秘具も上回る力。よし、気が変わった。エリール・クリスファアを　硝子の社『狩人』として迎え入れることにしよう」

「……………」

「……………」

沈黙に包まれた。

「へ？」

エリールは惚けた。

「あ、あ、あああ、あたしが……　硝子の社『狩人』おおお……」

エリールは驚愕した。

レイスは、愕然とした。

「な、何でエリールまで『先生』の仲間にしようとするんだよっ！
ていうか、アイカの乗っ取りの理由がまだ明かされてはいないし
……」

「簡潔に告げる。アイカは、ボクの乗っ取りに相性が良かった。ただそれだけのことさ」

それはアイカの「兄」だからだろうか。レイスは心の中でそう思った。

エリールは、戸惑っているようだ。

「気持ちに整理ができたのならば、ボクに気持ちを明かしてみるといい。もちろん、レイスも戻ってきてくれるよね？」

アイカの瞳が、レイスを貫く。その眼差しはアイカの瞳だけど、『先生』そのものだった。

「おい、エリール。どうすんだよ」

「あたしは 星龍騎士のままでいる。レイスも、星龍騎士に戻ってくるよね？ ね、レイス？」

エリールの微笑みに、レイスは安堵した。

「そうだな。おれは、星龍騎士だった。だから 『先生』。さようなら」

そう言うと、レイスとエリールの周囲を光が包み、消えた。

「星龍騎士独自の瞬間移動か」

アイカのすがたをした『先生』は、空を見上げた。

「『変』の使い心地は抜群。あとは、これを利用した新たなプロジエクトを立ち上げなければ」

そして、アイカは倒れた。

TC-1・あの時の「夢」を「正夢」にするために

視界に広がるのは、思い出の地。

いつもいつもこの場所から出発して、無事に任務を終えたら帰ってくる場所。

ここから始まって、ここで終わる場所。

そこには 星龍騎士本拠地『ゴッドーレア』があった。

レイスがエリールと共に、星龍騎士本拠地の中に入った時、コーヒーの苦い香りが広がった。

ああ、やっと帰ってこることができたんだ レイスはそう思った。

「お帰り、エリール。それと 久しぶり……レイス」
声がかけれ、レイスは声の主の正体を確認する。

「……マヌリエ師匠。お久しぶりです」

「あ、ワタシのこと覚えていてくれていたんだ？ わあ、お姉さん嬉しいな〜！」

「本当、何も変わっていませんね」

そこには長身の女性がいた。レイスとエリールに向かって笑みを浮かべた。

「あ、今ワタシのこと呆れていたでしょ？ でも、今だけは見逃してあげるよ。やっと帰ってきてくれたみたいだし、暗い話はしたくないでしょ？」

「 そうですね」

「今から休憩の時間なの。任務に行つてここにいない人もいるけどとりあえず、ガラシリオン硝子の社で何があつたのか、聞かせてもらうから」

「はい」

レイスは椅子に座った。

眼前にある机の上にはコーヒーが置いてある。コーヒー独特の苦い香りが、レイスの鼻を刺激する。

レイスの隣には、エリールが座っていた。レイスと向かい合う位置に座っているのが、マヌリエだった。

「大体のことは分かった。レイスは『狩人』No.17 呪縛の鎌 になつたことがある。エリールは、硝子の社のボスと思われる『先生』に、スカウトされた……」

マヌリエが、コーヒーを飲んだ。

「じゃあ、硝子の社の者が、ここを襲撃に来る可能性は十分に考えられる。そういえば、レイスは硝子の社を解雇されたの？」「いや、まだ分かりませんが、まだ解雇されていない可能性は高いと思います」

「うーん……。あのオウカも今は軽傷を負っているし……たつた1人の『狩人』で、あのオウカを傷つけるんだもの。……どんな訓練をしているのよ。あ、コーヒーお代わり」

レイスは脳裏に、ある出来事を思い浮かべていた。それは、アイカと戦つた時のことだった。

マヌリエ、オウカ、そしてレイスの3人は、星龍騎士でも指5本に入る者だった。

星龍騎士初級のレイスは、『狩人』No.2 二重刀 に不意打ちされて、負けた。

レイスの必殺技にも無傷1つなし。そして、反逆された時には、防御すらもできなかった。

圧倒的な差をつけられて レイスは、倒れてしまった。負けてしまった。

「そんな必殺技程度なら わたしには勝てない」

冷静な視線で見つめるアイカのすがたが、怖かった。

しかし、レイスは 硝子の社 に入ることができて、訓練を積んで リミッターを外した。

能力を極限まで上げて、戦闘のエージェントである『狩人』になることができた。

今なら アイカに勝つことができるのかもしれない……と、淡い気持ちを抱いた。

「ちょ……、レイス。聞いている？」

エリールに声をかけられたレイスは、現実に戻された。

「それにしても…… 硝子の社 ボスの『先生』という奴、悪趣味ね。なんで、敵を味方にするのか、そこがわからない。裏切るのか、もしれないのに」

「本当、悪趣味ですよえ。あたしも勧誘されましたけど、どうしてなんでしょう。…… 敵は少しでも減らしたいのでしょうか……」

その時、出入り口から何かが倒れる音が響いた。

「!？」

3人は、出入り口に視線を集めた。

そこには、 硝子の社 所属の兵士が数人いた。

「 硝子の社 の犬たちか……」

エリールは棒術具を取り出し、レイスたちに叫んだ。

「ここはあたしが引き受けます。マヌリ工師匠やレイスは、他の場所をお願いします。きつと……、あたしを迎えに来たのか、レイスを迎えに来たのか……。きつと、『先生』や『狩人』もいると思い

ます」

「そんなの駄目に決まっているじゃないっ！　レイスやエリールは狙われている立場なのよ！？　……ここは3人で戦いましょう。オウカは任務に行ってるし……他の出入り口は、他の人たちに任せるから」

マヌリエは、ボウガンを取り出した。

「さあ、行くわよ！」

マヌリエの合図とともに……、

「はいっ！」

それぞれの武器を構えたレイスとエリールは、兵士に向かって攻撃を始めた。

「はああああああ……そりゃあっ！」

エリールは棒術具を思いっきり振り上げ、兵士を叩き潰した。

「せいやあっ！」

レイスは鎌で、次々に兵士を薙ぎ払った。

「いくわよっ！　えいっ！」

マヌリエはボウガンで1度の攻撃で数人の兵士を倒した。

「さすがですね」

「うん、すごいでしょ？　あはは　　で、そんな場合じゃないでしよっ！」

「マヌリエ師匠がノリツツコミした」

「ど、どうでもいいでしょう？　そんなもの。他の人たちの加勢に行くわよ」

マヌリエがそう告げた時　　。

「その必要は全くないわ」

後方で声が聞こえた。

「全て　　わたしが倒したから」

「まさかっ！」

3人は振り向いた。

「久しぶりね、レイス。そして、エリール。わたしの知らない間で……裏切っていたなんてね」

「硝子の社『狩人』No.2 二重刀 アイカ・エリランヌ……！ レイスを監禁していた人ね？」

マヌリエが、アイカの名を口にした。

アイカの瞳は、殺意を秘めていなかった。

「あら、初めまして……かしら？ じゃあ、初めまして。わたしは硝子の社『狩人』No.2 二重刀 アイカ・エリランヌよ」「名乗るなんて、そんな余裕がよくあるわね？ このワタシを前にして」

「あら、あなたのことは把握しているわよ？ 星龍騎士初級マヌリエ・デイルード。星龍騎士伝統の家系デイルード家の人よね？ そして、現在の星龍騎士の中で最強の力を持ち、統率している」

アイカの口が緩んだ。

「……今回は、何しに来たのかしら？ 二重刀 さん？」

「上司からの命令で、迎えに来ました。対象は、エリール・クリスファア。邪魔する者は抹殺」

「……レイスの迎えは、ないわね？」

警戒をしながら、会話を進めていく。

「裏切り者 呪縛の鎌 については、後日こちらで処分させていただく予定なので、今は関係などないですよ。ということ、対象となる人物をこちらへ。抵抗するなら、この場で殺してあげても結構ですけど？」

「なんて汚い奴なの……」

マヌリエはアイカにボウガンに向けた。

「硝子の社……。目的はこちらと同じですけど、やり方が気に食わない」

「わたしたちのやり方が、あなたにとって気に食わなくても特に問題なんてないんで……、被害を最小限にしたいのならば、早くエリ

「イルをこちらへ渡しなさい」

「……くっ」

マヌリエは困惑の表情を浮かべた。

その時、レイスが告げた。

「今、ここに『先生』はいるのか？ アイカ」

「裏切り者に用など何も無い。抹殺されたいなら、してあげても結構だけど？」

「アイカ。おれと勝負してほしい」

「……は？」

エリール、マヌリエ、そしてアイカがレイスの言葉に疑問を持つ。

「抹殺されたいのならば、素直にそう言いなさい」

「殺されたくはない。ただ 勝負してほしい。別に、おれが負けたら抹殺すればいい」

「！？」

エリールがレイスの傍に行く。

「な、何で……そんな命を賭けてまで戦おうとするの？」

その時、レイスが小声でエリールの耳元で囁いた。

「大丈夫。負けたりなどしないから。それに、エリールを 硝子の社へ行かせたりはしない」

「……本当に？」

「絶対だ」

レイスはアイカのもとへと近づいた。

「正々堂々と勝負しようぜ？ 二重刀 アイカ・エリランヌ」
レイスのその言葉に。

「フフ……アハハハハハハハッ！！ いいわよ、レイス・ネ
フィリーー！！」

そして、レイスは鎌を構えて、アイカのもとへと走った。

TC-2・操作され続ける改造人形

アイカは、硝子の社 本拠地の外で倒れていた。

何故、どうして倒れていたのかは何も覚えていないようだ。

「あれ……？ 何でわたし……ここに倒れているんだろう？」

アイカは立ちあがった。その時、バイブレーションを感じた。通信のようだ。

「もしもし。こちら、二重刀 アイカ・エリランヌですけど」

『あ、アイカ。ボクだよ』

「『先生』……」

アイカは未だにあの事を気に留めていた。

『先生』がアイカの兄だと判明した時から、アイカは『先生』と顔を合わせたくないと思っていた。

「どういった用件でしょうか？」

『 狩人』No.17 呪縛の鎌 が脱走したよ』

「……え？」

アイカの記憶が正しければ、呪縛の鎌 とはレースのことだ。

「それ……本当ですか？」

『間違いはないはずだよ。そこで、アイカに任務を与えることにするよ。呪縛の鎌 は星龍騎士本拠地にいるようだ。だから、本拠地へ潜入。エリール・クリスファアを迎えに行つてほしい』

「……レースではなく、ですか？」

『そうだよ。呪縛の鎌 については、後日処分予定だから。だから、その処分の内容を考えているんだ。それに、エリール・クリスファアは未知なる力を秘めている。だから、『狩人』にしようかなと思つてさ』

「そ、そうですか……。じゃあ、任務に行つてきます」

アイカは通信を切った。

「レイスが脱走した……か」

そのことが、アイカには信じられなかった。

アイカの眼前には、鎌を構えたレイスがいた。

1度は戦った相手。圧倒的な差をつけて勝った相手。

しかし、相手は 硝子の社 『狩人』 になったことがあった人物。訓練を積んで、 硝子の社 所属兵士さえも1度の攻撃で戦闘不能にすることが出来るまでに鍛え上げられた能力。

けれど、アイカは負けることなど何も考えてはいなかった。

同じ相手にどれだけ戦っても、結果は同じなんだ、と信じていたから。

レイスが鎌を片手で振り上げた。アイカはレイピアを構えて、ガードの姿勢を保っていた。

鎌が振り下ろされた。前回、戦った時よりも能力が格段に上昇しているレイスは、レイピアを力で押し潰そうとしている勢이었다。

「……変わったね、レイス」

「余裕してる時間なんてないはずだろ？」

瞬間、レイピアの剣が粉々に砕けた。

「……」

「隙あり」

レイスは鎌で、アイカの身体を切り裂いた。

「!？」

たった一撃で、アイカは相当のダメージを受けた。前回戦った時、レイスが繰り出した必殺技以上の威力を持つ……たった一撃の通常攻撃。ただそれだけなのに、これだけのダメージを受けてしまうアイカは、自身の情けを感じていた。

「あああっ……」

アイカは後方へと吹き飛ばされた。

「油断、しちや駄目だろ？」

眼前には、鎌を構えるレイスのすがた。

「おれは『狩人』になって、訓練を重ねることで、リミッターを外してしまった。自己管理をしていなかったおれが悪い。けれど、そのおかげで最強の力を取り戻すことができた」

「最強の……力？」

「大切な人を守る力。そして、邪魔者は排除する力」

アイカは刀を構え、振った。レイスは後方へとジャンプした。

「わたしはこれで終わりじゃない。終わりなんかじゃないんだからあああああつつつ！！！」

アイカは刀を両手に握り締めて、レイスのもとへと走った。

「わたしのこと、何も知らないのに……わたしを裏切ったくせに……幸せになろうとするなあああああ！！！」

「アイカは今、幸せじゃないのか？」

レイスのその言葉が、アイカの行動を止めた。

「……え？」

「アイカは、兄と会えたんだろ？ 消えてしまったと思っていた兄と再会できて、幸せじゃないのか？ 硝子の社 にいることで、アイカが幸せになることができないのなら 逃げてしまえばいい」

「は？ 何を、言っているの？ お兄ちゃんが、わたしを救ってくれたんだよ？ なのに、お兄ちゃんに恩返しをしないでわたしだけ逃げるなんて……できるわけじゃない」

「アイカがそう思っているのなら、それでいい。苦しみ続け、罰を与え続けられたいのなら、そこにいればいい。けれど、おれはようやく確信することができた」

レイスは呼吸を整えて

告げた。

「アイカは、いいように操られた人形でしかない」

「……え？」

アイカはレイスの言葉を疑った。

「今、なんて言って……」

「アイカはただ、誰かによって都合のいいように改造された人形でしかない」

「そ、そんなこと……あるわけないじゃない。それに、誰かって誰のことよ……？」

「本当は、アイカ自身も気づいているんじゃないのか？」

アイカは何もかもを見好かれた違和感を覚えた。

「……」

心の中でひそかに思っていた「誰か」。

「……お兄ちゃん？」

「そうだ。アイカの兄で 硝子の社 ボスである『先生』だ」
アイカは驚愕した。

「……嘘だ」

「嘘なんかじゃない。第一、『狩人』も、『先生』の駒でしかない」
裏切られた感じになった。

「お兄ちゃんがわたしを、操っている？ そんな都合のいい話があるわけないじゃない。あるわけが……ない……」
感情がこみあげてきた。

アイカはそのまま、星龍騎士本拠地を出た。

「レイス」

逃げていたらしいエリールがすがたを現した。

「今の話……本当なの？」

「本当の話だ」

「じゃあ、何でアイカさんは……あんなにも悲しい表情をしていたの？」

その答えは、レイスにもわからなかった。

TC-3・少年は、少女を愛していた

そんなわけがない。

そんなわけがない。

お兄ちゃんは、いつだつてわたしの隣にいてくれた。

剣を扱うのはすごく上手で、わたしはそんなお兄ちゃんに憧れていた。

離れ離れになっても、お兄ちゃんはわたしに笑顔を見せてくれた。

「必ず帰ってくる」て約束してくれた。

お兄ちゃんは『先生』となって帰ってきた。そして、お兄ちゃんはわたしを救ってくれた。
それなのに。

わたしはいつから、人形になってしまったって言うの？

アイカはただ、逃げ続けた。現実から徹底的に抗いたくて、逃げ続けていた。

「そんなの……わたしは、決して信じたりなんかしない！ 信じたりなんかしない！！」

けれど、レイスはアイカに告げた。

「アイカは、都合のいいように改造された人形でしかない」と。

何でレイスがそのことを知っているのか。レイスは『狩人』となることで、何か確信を得たのだろうか。その結果、「『狩人』は『先生』の持ち駒」という結論に至ったのだろうか。

「もう……わかんないよ」

その時、アイカの視界の先に誰かが映っていた。

「……あ」

「やあ、アイカ。任務は順調に進んでいるかな？」

そこにいたのは。

「『先生』」

『先生』だった。

「アイカはどうして、前みたいにお兄ちゃんて呼んでくれなくなつたのかな？　ボク、意外に嬉しかったのになあ」

アイカは、『先生』に対して　複雑な感情を抱いていた。

「わたしの記憶を封じたのは、お兄ちゃんだったはずだよ。だから、わたしはお兄ちゃんのことを『先生』としか言えなかった。だけど、わたしは　お兄ちゃんに疑問を持っている。聞いても、いいかな？」

「うん、いいよ。ボクが答えられる範囲なら答えてあげる」

アイカは覚悟を決めて、疑問を投げた。

「どうして、わたしの記憶を封じたのか。再開した時はお兄ちゃんじゃなくて『先生』だったのか。どうして　わたしを、助けてくれたのか」

アイカがそう質問した時、『先生』は複雑な表情を浮かべた。

そして考えがまとまったのか　『先生』は口を開いた。

「まず、記憶を封じた理由。それは、ボクが『先生』だと、アイカに認識させなかったからだ。アイカの友だちであるお兄ちゃんは、戦場に消えた。　そう認識してほしかったからだ」

「……どうして？」

「それには色々な事情がある。アイカには話すことができない。けれど　いつか、話す時期になれば話すことにする」

アイカは、残念そうな表情を浮かべた。

「じゃあ……どうして、わたしを助けてくれたの？ あの時、町にいたわたしを」

「それは簡単さ。アイカを助けたかった。ただ、それだけだ」

「それは違うと思う」

アイカはキツパリと、『先生』の言葉を否定した。

「わたしを助けたかった理由。そんなの、わたしは知ってるよ。後の硝子の社と名付けられる社の、駒にしたかったんでしょ？

お兄ちゃんの」

「え」

『先生』は、驚愕の表情を浮かべた。

「『狩人』と名付けられた戦闘のエージェントは、お兄ちゃんが企んでいる『天地計画』を無駄なく進められるようにするための駒。そのためにお兄ちゃんは、わたしを鍛えて『狩人』にした。もともと、わたしはお兄ちゃんに憧れていたし、稽古も毎日やってた。だから、お兄ちゃんに続くNo.2 二重刀 になることができた。

これが、真実なんでしょ？ お兄ちゃん」

これが、アイカの知識をフル回転させた結果だった。

『先生』も、さすがにそこまで考えてはいなかったらしく、間を置いてから告げた。

「それが、アイカなりの意見かあ。よく練られたシナリオだ。まあ、ほぼ正解だけど、不正解もある」

「……え？」

完璧だと思っていたアイカの意見に間違いがあったことに気づいたアイカは、少しだけ驚愕した。

「どの部分が、間違っていたのかな」

「アイカを助けたかった理由」

『先生』は、アイカを見つめてから 明かした。

「アイカの意見の通り、駒にしたかったのもアイカを助けた理由の1つだ。それとは異なってもう1つ、理由はある」

「それは、何？」

そう言つと、『先生』は、悲しい表情でアイカを見つめた。

「愛しい少女にお兄ちゃんと呼ばれた少年は、本当に少女を愛していた」

「……お兄ちゃん？」

「けれど、戦っている間に少年は、お兄ちゃんではいられなくなつてしまつたんだ。そして　再び、会うことなど夢にも思つていなかった愛しい少女と再会した。お兄ちゃんではなくなつたはずの少年は、再び少女を愛しいと思つてしまつた」

『先生』は寂しそうな表情でアイカを見つめて　アイカを抱きしめた。

「……おにい、ちゃん？　いつたい、どんな冗談で……」

「おれは　アイカが、好きだ。それはボクでも、おれでも」

それは、突然の愛の言葉。

アイカは状況が理解できずに、頭の中が混乱していた。

「また……冗談なんて……」

「冗談じゃない。これは　真実だ。愛しいと思つていたから、

おれはアイカを助けた」

アイカを抱きしめる『先生』の腕が、強くなつた。

「……っ」

「おれは……アイカが好きなんだ」

そう呟く『先生』の表情は、お兄ちゃんそのものだった。

T c - p 1・初めて出会ったあの日

お兄ちゃんは、わたしを好きだって言ってくれた。
すごく嬉しいよ。

わたしは、お兄ちゃんだとは知らなかったのに『先生』のことが好きだった。それはきっと お兄ちゃんだったことをに薄々気づいていたいた証拠なのかもしれない。

ただどね、お兄ちゃん。

1つだけ、聞きたいことがあったの。

『先生』は、腕からアイカを離した。

もう1度、アイカを見つめた。アイカは、突然の告白に戸惑っているようだ。

「ねえ、お兄ちゃん。1つだけ、聞きたいことがあるの」

「ん？ それは何だろう」

「お兄ちゃんは お兄ちゃんなんだよね？」

「へ？」

いきなり、よく分からない質問をアイカがしたので、『先生』は思わず緊張を解いた。

「当ったり前だろ？ おれは、アイカと一緒に稽古をしてきたお兄ちゃんだ」

「そういう意味じゃない。だって……本当にお兄ちゃんだったら、妹に恋するはずがないから……」

アイカの言いたいことが、『先生』は理解した。

『先生』が、アイカの兄なのか？

そう聞きたいようだった。

「まだ解除していない呪縛の欠片があるのか？」

「え」

お兄ちゃんは何を言ってるの？

アイカはそう聞こうとした。

それじゃ　　まるで。アイカの言っていることが、真実じゃないみたいな気がして　　。

その時、アイカの脳裏で何かが崩壊していく音が響いた。

ピキピキと割れていく何か。その中で、アイカの脳裏で　　何

かが映し出されていた。

それは、アイカが12歳だった時のことだった。

村に暮らしていたアイカは、裕福な生活に恵まれていた。

その中で、アイカの家の中に、誰かが引っ越してくることになった。

誰が引っ越してくるのか　　アイカは、気になってしょうがなかった。

そして翌日。アイカの隣に誰かが引っ越してきた。

引越しの邪魔になったらいけないので、挨拶は引越しの準備が完了したから、と両親に注意を促されたアイカは、隣の家の引っ越しの準備が完了するのを待っていた。

そして準備が完了した時、アイカは家を飛び出した。

インターホンを鳴らした。扉が開いた。

「はい、どちら様で　　」

そこにいたのは、木剣を手にしている1人の少年。外見から14歳前後と思われる少年だった。

「えとえと　　挨拶に来ましたっ！　　隣の家に住んでいるアイカ・エリラン又って言いますっ！」

「あ、はあ……。来て早々ごめんだけど、親に挨拶してくれないか？　今から稽古するから」

少年は無表情でそう呟いて、アイカの横を通り過ぎた。

アイカはただ茫然と、少年のすがたを視線で追っていた。

少年は家の横で、両手で木剣を握り、上下に振っていた。素振りのようだ。

アイカは無意識のうちに、少年のもとへと近づいていった。

少年はアイカの存在に気づいたのか、アイカに一言言った。

「稽古の邪魔になる。用件が終わったなら早く家に帰れ」

「何でそんな冷たいことを言うの？　これからここで暮らしていくんでしょ？　みんなとコミュニケーションを持っていたほうがいいと思うなあ」

「そんなの　お前になんか関係ないだろ」

そう呟く少年に、表情は何もなかった。

「キミってさ、友だちを持ったことがないの？」

「ない。おれは一人で充分だ。他人との関わりなんか、なくてもいい」

アイカの質問に即答した少年。何も考えずに答えを出したことに、アイカはがっかりしていた。

「キミってさ、過去に苦しい思いをしてきたんでしょ？」

アイカがそう言った。

「　お前には関係のない話だ」

「うん。全く関係ないよね。だから、わたしはキミが過去にどんな思いをしてきたのか、聞かないよ。だけど、その思いは、ここで断ち切らなきゃいけないと思うんだ」

「おれは孤独のままでいい。他人と関わりたくもない」

「じゃあ、わたしが友だちになつてあげるよ。じゃあ　わたしのお兄ちゃんになつてくれる？」

「!？　なんでおれが、お前の兄になんかなきゃいけないんだ
よっ!」

「別に本当のお兄ちゃんになってって言うっているわけじゃない。わたし、お兄ちゃんに憧れていたんだ。だから、代わりのお兄ちゃん別に、キミはわたしのことを妹だなんて思わなくてもいいよ。これで、キミの苦しい過去を断ち切ることができなかつたら　　キミとは関係を持たないことにする。つまり、お試しってことだよ」

「何でおれが、お前の希望を叶えるために義理の兄になんかなきゃいけないんだよ」

「別にいいでしょ？　1度決めたことは、もう2度と変えることなんてできないんだからね？　じゃあ、今からキミはわたしのお兄ちゃん」

「　　もう、何もかも勝手にすればいい」

完全にアイカのことを呆れた少年は、どうでもよくなってしまったようだ。

「うん、ありがと。　　お兄ちゃん。あ、そうだ。稽古見ていい？」

「何でも勝手にすればいいだろ!」

吐き捨てた感じに少年が叫ぶと、アイカは笑顔になった。

「わかった。じゃあ、このまま見てることにする」

そして、アイカは「お兄ちゃん」の稽古を、夕陽が2人を照らすまで見つめていた。

T c - p 2 ・ だから 強くなった

それから毎日 アイカはお兄ちゃんが稽古を始めた時に家を飛び出して、稽古を見つめていた。

お兄ちゃんはただ無表情のままで、剣を振り続けていた。それでもアイカは、お兄ちゃんの稽古を見続けていた。

そのことがアイカにとって 1 番嬉しかった。

ある日、ふとアイカは心の中で思っていた。

「お兄ちゃんと勝負がしてみたいなあ」と。

そう思ったアイカは、稽古で剣を振っているお兄ちゃんに話しかけた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「……なんか気色悪いな。他人から兄呼ばわりされるのは」

「そんなの、気にしないの。ね、わたしと勝負してみない？」

「は？ お前、何か剣術とか使えるのかよ」

「ううん。全然使えない。だけど、お兄ちゃんの実力がイマイチわかんないのよね。だから、わたしでも勝てるかな？ とか？ そんなことを思っちゃって。ね、いいでしょ？」

「全くの素人と戦っても意味はない。木偶の棒と戦っているのと同じだ」

「それでもわたしは戦いたいんだから戦うのっ！ これは決定していることなの！」

「なんか、言っていることが滅茶苦茶だぞ」

「ていうことで、お兄ちゃんは本当の剣で、わたしにもお兄ちゃんの余りとかでいいから……武器、貸してくれないかな？」

お兄ちゃんは厳しい表情でアイカを見つめた。
そして1つ溜息をしてから、家へと帰った。

「あ、お兄ちゃん。武器でも取りに行っただよね」
そう思ったアイカは、しばらく待機していた。

そして数分後。扉からお兄ちゃんがやってきた。

持っているものは、木剣と　　細い木剣だった。

「本当の剣で戦うと危ないだろ。万が一怪我したら、おれの責任になる。だから、お前はこれだ」

お兄ちゃんは、細い木をアイカに渡した。

「レイピアと言われる細剣の形をした木剣だ。それしかなかったから文句は言っな」

細い木剣を受け取ったアイカは、満面の笑みでお兄ちゃんに言った。

「お兄ちゃん。ありがとっ！」

「ほら。さっさと始めるぞ」

お兄ちゃんは、アイカに背を向けた。

「お前が満足すりゃいいんだろ？」

「だって、お兄ちゃんの実力が分かんないんだもん」

アイカがそう呟くと、お兄ちゃんはアイカのもとへ接近した。

「その剣で自分自身の身体を防御しないと、跳ばされるぞ」

「え？」

瞬間、アイカの両手に握っていたはずの細い木剣は、後方へと弾かれた。

「……え？」

いつの間にか木剣がなくなっているのを、アイカは確認した。

「これ……どうなって」

「だから、木偶の棒と戦っているのと同じなんだ。まあ、いい。これでおれの実力がわかっただろ。わかったら、もう稽古なんか見に来るな」

お兄ちゃんは、細い木剣を回収した。

「ほら、さつさと家に帰れ」

家に帰れ、とお兄ちゃんが促すが、アイカはお兄ちゃんに言った。

「わたし……今度からは、お兄ちゃんと一緒に稽古するっ！」

「……は？」

お兄ちゃんは、驚愕し、呆れた表情でアイカを見つめた。

しかし、アイカの表情は真剣だった。

「それ……本気か？」

「そんなの当たり前でしょ？ わたしは1度決めたことは変えない主義なの。わたしもお兄ちゃんみたいに強くなりたい。だから、稽古もやるっ！」

「あのな……稽古をやった程度で、上達するようなものじゃないんだぞ。剣術は」

「それでも別にいいよ。少しでも変わっていききたい。強くなりたいだけなんだ」

アイカはまた、お兄ちゃんに笑みを浮かべた。

お兄ちゃんは、表情を変えなかった。

TC - 4・決意 その先の未来へ

お兄ちゃんと共に稽古することになったアイカ。

1回剣を交えたが、どう考えても、アイカに勝機はなかった。

だから、お兄ちゃんみたいに強くなって、今度戦うときは、

お兄ちゃんに勝ってみせる。

そう、心の中で誓っていた。

稽古を続けてきて大体1年後 運命のあの日はやってきた。

アイカとお兄ちゃんは全く関係ないのに、それでも運命の日はやってきてしまった。

「戦争」だった。

「アイカっ！ 逃げるぞ！」

父親が、そう叫んでいる気がした。

アイカは、ただひたすらと逃げていた。

空中には、爆弾を備えている飛空艇が空を埋め尽くしていた。空は紅に染まっていた。

当然、アイカの心は恐怖で満たされ、怯えていた。

そして、アイカの隣にお兄ちゃんはいなかった。お兄ちゃんは、戦争に勝利するために、戦場の中へと消えていつてしまった。

「お兄ちゃん。……帰ってくるよね。そう、約束したもん」

お兄ちゃんと約束したことだけが、アイカのを精神を保たせていた。

そして 時は、アイカの知る記憶へと繋がるのだった。

アイカはただ、驚愕することしかできなかった。

「お兄ちゃんが言った 呪縛の欠片って……このことだったの？」

『先生』はただ、沈黙を保っていた。

「お兄ちゃんは、お兄ちゃんじゃなかったんだ」

その真実に、その現実には、アイカはショックを受けていた。

お兄ちゃんの正体は、偶然アイカの隣に引越してきた少年のことだった。そして、「戦争」の避難時で隣にいなかったのは、もともと家族でもなかったし、バラバラで逃げたからだった。

「はは……あはは……」

ただ、笑うことしかできなかった。

「お兄ちゃんがお兄ちゃんじゃなかったのは、わかった。だから、お兄ちゃんはわたしのことが好きなんだね」

「……そういうことだ。ごめん、アイカ。まだ解除していない欠片があつて」

「別にいいよ。だけどね、わたしは今、迷っているの。このまま硝子の社 にいるべきなのか、レイスみたいに逃げるべきなのか。

わたしの人生の分岐点だと思う。どっちへ行けばいいのか、迷うの」

「どうして迷う必要なんかある？ このまま 硝子の社 の『狩人』として、任務を遂行してくればいいだけだよ」

『先生』のその言葉で、アイカは決断した。

「お兄ちゃん。 うつん、『先生』」

アイカは、口にした。

「わたし、二重刀でいることを、辞めようと思う」

「え」

突然の辞職宣言。『先生』は一瞬、現実を疑った。

「もう『先生』のこと、信用することができない。今までずっとわたしを裏切り続け、呪縛としてわたしの過去を封じて、そしてやっと放たれた。どうしてそんなことするのか　わたしには、理解できない」

「……アイカ」

「だから、もうお兄ちゃんに甘えるのは止めようと思う。これからは、1人で生きていくことにする。お兄ちゃんから離れたいの。これって、わがままなのかも知れない。だけど、これで最後にしたい」

「それは……呪縛の鎌がそう、アイカに言ったのか？」

「ううん。レイスは何も関係ない。ただ、手伝ってくれただけ。そしてやっと　お兄ちゃんから離れることができる。これは、わたし自身が決めた結果」

アイカは、懷から刀を取り出した。

「最後に、お兄ちゃんと勝負したい。あの時以来、わたしはお兄ちゃんと1度も剣を交えていない。今回は、本物の剣を使って、ね。

いいかな、お兄ちゃん」

アイカは『先生』に訊ねた。『先生』は寂しそうな表情でアイカを見つめる。

「1つだけ、約束してほしいことがある」

「何？『先生』」

「この勝負で、ボクが勝ったら　アイカは無理矢理にでも、硝子の社へ戻る。けど、アイカが勝ったら、ボクは硝子の社を解散して、アイカとも縁を切ることにする。この約束を守ってくれるのならば、ボクはアイカと勝負する」

「うん、いいよ。やっとあの時の続きがやれるだけで
それで
けで、わたしは嬉しいよ」

アイカは左手にレイピア、右手に刀を握った。

「お兄ちゃん。 武器を構えて？」

アイカにそう指摘された『先生』は、懷から剣を取り出した。重量がありそうな大剣だ。

「あれからどれだけ成長したか……、 二重刀 の力、見せてもらうとするか」

「うん、わたし……負けたりなんか しない」
そして、地面を蹴った。

TC-5・「あいつ」がいたから…？

「はああああああっ！！」

アイカは、刀を振り上げた。『先生』も、大剣を握って接近する。左手に持つレイピアで、大剣を弾き、右手に持つ刀で攻撃する。それが、アイカの通常攻撃だった。

レイピアが、大剣に防御される。細い剣のレイピアでは、すぐに大剣に弾かれてしまうだろう。そう考えたアイカは、力任せにレイピアで弾こうとしていた。

「やっぱり……アイカは何も変わらないな」

「え」

「素人ではなくなっただけ　木偶の棒と戦ってるのと同じだ」

「それは……どういう意味で」

言いかけたその時、レイピアが大剣によって弾かれた。その反動で、アイカは後方へと大きく飛ばされた。

「これぐらいで終わるわけないよな」

「うん、当たり前だよ。だけど、あの時と変わらないって……どういう意味なの？」

「人形は、命令されたものしか実行しない。それは、アイカにも言えることだ。言われたことしか実行しない。だから、木偶の棒と同じなんだ。戦法が変わっていない」

『先生』のその言葉は、正しかった。

アイカは　硝子の社　に入ってから、『先生』に教えてもらった戦法でしか戦ったことがなかった。そのため、初めて戦う者にはダメージが通用するが、アイカの戦法を知ってしまえば、タイミングを掴んで防御して、攻撃すればいいだけのことだ。

「だったら　わたしは、何をすれば……」

「おれから離れるんじゃないのか？　アイカ」

いつも困難に隔たれる時、お兄ちゃんがアドバイスをくれた。そ

の言葉があつたからこそ、アイカは今までこうして戦うことができた。

けど、アイカは今度からお兄ちゃんから離れる。さっきそうやって宣言したばかりなのに　お兄ちゃんに甘える癖は治ってはいない。

「このままならば　アイカは、おれの言いなりでしかない。硝子の社　に戻るか？」

「　戻らないよ。二重刀　は、ここで捨てるんだから」
言葉で言うのは簡単だが、実行するのは難しい。そんなこと、アイカはわかっていた。しかし、言葉でアイカ自身を強くしないと、負けてしまうかもしれない　という、気持ちの弱さを補うために、アイカはただ意地を張っていた。

「わたしはお兄ちゃんには負けない　お兄ちゃんから離れる。そう決意した。だから、その気持ちに変わりなど何もないっ！」
アイカは『先生』にそう叫び、レイピアと刀をしっかりと握りしめて、『先生』に向かって瞬間移動して、攻撃を開始した。『先生』はあっさりと身をかわした。

それでもアイカは挫けず、『先生』へと攻撃を続けた。『先生』はただひたすらと回避を続けるために、アイカはダメージすら与えられることができない。

このままでは、アイカは体力の限界が来て負ける。戦法を変えなければいけない。アイカはそう考え、瞳を閉じた。

「敵に余裕を見せるなど　そんな暇などないはずだ」

『先生』は嘲笑ったのかも知れない。しかし、アイカは精一杯考える。お兄ちゃんから離れて、二重刀　を捨てるために　。
アイカは視界を広げた。

「わたしは　負けたりなんか、しないんだからあああああ　つつっ！」

そして、アイカはレイピアを床に落とした。両手で刀を握りしめて　『先生』のもとへと走る。

「二重刀を捨てる。　　そういう意味か」

『先生』に向かつて、刀を振り上げる。やはり『先生』は回避する。それでも、アイカは再び攻撃の姿勢をとる。

レイピアを捨てたことで、アイカは『先生』の回避の隙を見つけやすくなっていた。

「この隙を突いて　　お兄ちゃんを、倒すっ!!」

アイカが、刀を振り上げた。

「!？」

『先生』が怪訝な表情を浮かべた。

表情を浮かべている瞬間、『先生』の両手に握られていた大剣は、後方へと弾かれた。

「　　や、やった」

アイカは、思わず笑みを浮かべる。

「……………」

『先生』はただ、後方へと弾かれた大剣を、見ていた。そして、口元を緩めた。

「おれの　　完全敗北、か。　　強くなったな、アイカ」

お兄ちゃんのような『先生』の笑顔だった。アイカも笑みを浮かべた。

「もうお兄ちゃんの木偶の棒なんかじゃないよね。やっと　　離れられる」

アイカは刀を戻した。そして、『先生』を見つめる。

「今まで、ありがとう。お兄ちゃんがいたから、今のわたしがいるんだよ。本当に　　ありがとう」

アイカがそう告げると、『先生』の瞳から、ふと雫が落ちた。

「　　何で、おれ……涙を、流して」

無意識のうちに流していた涙は、徐々に溢れていった。

「じゃあね、お兄ちゃん」

アイカは最後に、笑みを浮かべた。

『先生』の瞳に映るアイカの笑顔は、涙でよく見えなかったが1番綺麗だった。

そして、アイカは『先生』に背を向けた。

が、ふと『先生』は、脳裏で思った。

「待つて……くれないか」

アイカは足を止めて、『先生』を見つめた。

「どうしたの？」

「あいつがいなかったら アイカはおれの告白を、拒否しなかったのか？」

「え」

アイカは、驚愕の表情を浮かべる。

「それ……どういう意味なの？」

「レイスに協力してもらわなかったら アイカはまだ、二重刀 でいたのか？」

「……言っている意味が、わからないよ」

『先生』は、叫んだ。

「あいつがいなかったら、アイカはおれが好きだったのかよっ!？」

思わず叫んでしまったことに、今更ながら気づいた。

「あいつがいたから あいつがいたから、おれたちの関係は崩れたんだ……」

頭の中が、混乱していた。

ただ1つ言えることは、「あいつ」がいたから アイカは

硝子の社 を抜けた。

全てを奪った 。「あいつ」のせいで。

全て、全て……。

「あいつが悪いのに……アイカを奪ったあいつが悪いのにつっ!」

『先生』の心の中は怒りで占領されていた。

無意識のうちに、『先生』は、アイカの横を通り過ぎた。

「お兄ちゃんっ!？」

アイカの必死の叫びも、今の『先生』には届くことなどなかった。

レイスは、王都内を散歩していた。

隣には、エリールがいた。

星龍騎士の本拠地がある王都にて、レイスは束の間の休息を楽しんでいた。

「それにしても……アイカさん、どうしたんだろう……」

「アイカならきつと大丈夫だ。それに、おれは 硝子の社 と縁を切った。これを最後にして何も関わらないさ。おれの最後の任務は失敗に終わった。これで、おれは星龍騎士を辞めることにする」

レイスはそう言うと、エリールは驚愕していた。

「星龍騎士を……辞職するの？」

「最初からそのつもりでいた。硝子の社 壊滅任務を終えたら、おれは星龍騎士を辞めることにしていた。ずっと決めていた。それなのに、硝子の社 に捕まったり、アイカと関わったり、『狩人』となっていたり 思いもしなかった出来事が続いて……やつとこの時を迎えられるんだ。今のおれは、そう思ってる」

「……レイス」

「正直、『狩人』だった時のおれは、星龍騎士を辞めることができないと、本気で思ったことなんて何度もある。けれど おれは、この時を迎えられる」

「今が大事な時期なのに……マヌリエ先生は、許してくれるの？」

「星龍騎士がどの時期に辞めようと、自由なんだ。いつ辞めようと他人はそれを受け入れなければいけない。それは、エリールも試験でやったはずだろう？」

「 だけどっ！」

エリールが言いかけた時、前方に誰かが走ってくるのを、エリールは見えた。

「……レイスっ!!」

走っているのは、アイカだった。

「アイカさん!? いったい、どうしたの!？」

エリールがアイカに話しかける。アイカは呼吸が荒れていたが、それでも話す。

「お兄ちゃんが……『先生』が豹変してしまったの。早く、ここから逃げなきゃレイスが」

「 見つけた」

「!!」

アイカが後方を振り向く。そこには『先生』が大剣を片手に、歩いていた。

「レイス、早く逃げてっ!!」

アイカは、早く逃げるよう促す。

しかし、レイスとエリールは、状況が全く理解できなかった。

「何でもいいからっ! 後で説明するから 今はできる限り、早く逃げてっ!!」

「レイス、逃げよう」

エリールがレイスに言う。

「……あ、ああ」

レイスは多少戸惑いながらも、エリールの言葉に頷き、『先生』がいる方向とは逆の方向へと逃げ始めた。

「お兄ちゃん。……レイスは何も関係ないはずだよ。全てはわたしが決めた。さっきの戦いで、全てを決めるっていったじゃない。それも裏切るの?」

「あいつが悪いんだよっ! 今までアイカはおれのことを好きだったのかも知れない。なのに なのに、あいつにアイカの心は奪われた!!」

「違う! お兄ちゃん。いったい、どうしちゃったの? わたしは

もう 硝子の社へ戻ったりなんかしないよ。わたしが勝ったから
硝子の社は解散。その約束は、どうなってしまったの？
噓、だったの？」

アイカが悲しそうな表情で呟くと、『先生』の口元が緩んだ。

「バレたな、エルフィード」

「え」

エルフィード。それは、いったい……？

「エルフィードのこと知らんのか？ アイカ・エリランヌ」

アイカのことをフルネームで呼ぶ。口調が多少変化している。

「あなた……お兄ちゃんじゃないわね？ それに、エルフィードって何よ！」

「こいつのことだよ」

『先生』の外見の「誰か」は、人差し指で自身の身体を指した。

「まさか」

「硝子の社 所属『狩人』No.1 先生 エルフィード・オルナ。こいつの本名も知らなかったのかよ」

「誰か」は、淡々と『先生』の本名を告げた。

「どうして……お兄ちゃんの身体を乗っ取っているの？ あなたは誰？」

「一気に質問するな、アイカ・エリランヌ」

アイカは、直感的に不安になった。

そして「誰か」は、名乗った。

「硝子の社 『支配者』No.2だ」

「え？」

アイカは、驚愕した。

「あなたも、硝子の社に所属しているの？」

「まあ、そういうことになるな。そろそろ、脱出するか」

『支配者』No.2は、すがたを現した。『先生』の身体は、地面に倒れた。

「お兄ちゃん……!？」

アイカは、倒れた『先生』のもとへと走った。

「お兄ちゃん!? お兄ちゃん!!」

アイカは必死で叫ぶ。しかし、『先生』は反応しない。

「エルフィードは気絶しているだけだ」

別の声が、後方で聞こえた。アイカは振り向いた。

「『支配者』No.2とか言っていたわね。本名はないの？」

「『支配者』というものは、『支配者』となった瞬間から名前なんて奪われるからな。だから、本名なんか知らない」

「『狩人』だったわたしでも、あなたの存在は知らないわよ。そっちは、わたしの存在をどれだけ知っているの？」

『支配者』No.2は、微笑んだ。

「硝子の社の大体は、知っている。『狩人』の全ては分かっているさ。もちろん、先程逃走した裏切り者 呪縛の鎌 もな」

「それで、あんたは何しに来たの？」

「エルフィードが気にかかっていた少女が気になったただけだ。だから、エルフィードの身体を乗っ取り、ちよっと偵察に来ただけだ。

オレはエルフィードほど悪趣味ではないが、それでも、あの少女は気になった」

あの少女。気になった少女……。

「エリールのことね!？」

「星龍騎士2級エリール・クリスファア。まさか10の秘具の力を破るなんてな」

「あんなの……奇跡でしかないのよっ!？」

「それは、奇跡という名の運命だろ? 運命に抗うことはできない。」

それはそれで、不思議だとか思わないのか？」

アイカは、どうすればいいのか悩んでいた。

「わたしはもう『狩人』じゃない。だから、わたしは あんたの仲間じゃない」

「へえ？ それで、オレに反抗しようとするのか？」

「そんなことしたら、わたしが死んでしまふ。自ら死を選んだりはしない。だから 逃げる」

アイカは笑いながら、『支配者』No.2に告げた。

「は？」

「もう、わたしは自由の身だから、お兄ちゃんの言いなりなんかじゃないし、駒でもない。だから 逃げ続けるよ。自由の身だしね」

「それはそれで結構だが オレたちのやることに、割り込んだりするなよ」

「外見から強そうだもん。どう考えたって、わたしが勝てるような相手じゃない」

アイカは、『先生』をただ見つめていた。

「お兄ちゃん？ わたしは行くからね」

そう言った時、『先生』の瞳が開いた。

「あいつが悪いんだ。ただ……おれは、アイカが好きだった」

「その気持ちは、嬉しいよ。だけどね、わたし 好きな人ができた」

その言葉を、『支配者』No.2は聞いていた。

TC-7・抗いたい運命：だけど

「アイカ・エリラン又は逃げたな」

『支配者』No.2は、『先生』に向かってそう告げた。

「確かに、おれは負けた。だから、硝子の社を辞める」

「おいおい。それ、マジで言ってるのか？ エルフィードがいないと、『支配者』側はかなり困るんだけど」

『先生』は身体を起こし、『支配者』No.2を見つめた。

「約束したものはしょうがない」

「だけど、アイカは何も思っていないはずだ。ここは1つ、オレたち協力しないか？」

「は？」

『先生』は、『支配者』No.2に怪訝な表情を浮かべた。『支配者』No.2の表情は真剣だった。

「いや、これは真面目な話。星龍騎士の1人であるレイス・ネフィリーも辞職する予定らしいし、ここが1番のチャンスだとオレは思っている。エルフィードの悪趣味だと思っていたが、これは本気で考えたほうがいい」

「悪趣味だというのは止めてくれないか。他人の趣味だから」

「だから、エリール・クリスファアを硝子の社へと入れる。『

狩人』にするのも結構だ。別に、実力を上げてきたのならば、こちら側も『支配者』として、スカウトさせていただく。そのためにも

アイカを使ってみないか？」

「！？ 何を言っているんだ？」

「正確に言うとは、アイカの気持ちだ。さっき、エルフィードに言っただる。『好きな人ができた』って。あれ、絶対にレイスのことだ」

「……」

「レイスはエリールの彼氏だ。ま、そのことから考えると、三角関

係ができるな」

『支配者』No.2は少々ニヤけた表情で言う。

「……フザけているのか、お前」

「いや、ここで話を戻して。ここでアイカの気持ちが登場だ。オレが、エリールに暗示をかける。当然、レイスは不信感を覚える。そこに、アイカのフォローが入るだろう。そして、傷ついたレイスの心をアイカが癒す。完璧な恋愛物語だと思わないか？」

「お前も随分、悪趣味だな」

「レイスは心を癒してもらい、エリールは 硝子の社 の仲間入り。メリットだらけで、一石二鳥だ」

「まあ、いい考えなのかもしれないな」

「じゃあ、即実行」

『支配者』No.2は、懷から杖を取り出した。

「ということで、『恋愛物語』第1章の始まり」

冷酷な瞳で『支配者』No.2は呟き、杖は青い光を放った。

「レイス ……!!」

レイスとエリールの後方から、声が聞こえた。

「アイカさんだよ」

エリールは後方を振り向いた。レイスとエリールはその場で立ち止まり、レイスは後方を振り向いた。

「どうしたんだよ」

「いや、さっきの状況の説明。後でするって言ったでしょ？」

その言葉で、レイスは理解した。

「ああ、そんなこと言ってたな。正直、何が何だか理解できなかったもんな。『先生』が豹変したとか訳わからなかったからな」

「ごめんね。じゃあ、状況を話すから」

そして、アイカは状況の説明をした。

「……ということだったの」

「そんなことが……。それに、『支配者』No.2という人が気になるね……」

「硝子の社『支配者』No.2。そいつが、エリールを狙っていたのか。それはやばいな。早く安全な場所へ逃げるべきだ。王都からここは、そんなに遠くは離れていない。見つかるのも時間の問題だ。な？ エリール」

「……………」

エリールは沈黙していた。

「……エリール？」

レイスが、エリールの表情を確認しようとする。

瞬間、エリールは棒術具を手にし、レイスに向かって振った。

「！？」

レイスは後方へと跳躍して回避した。

「まさか……！？」

アイカが、何かを思いついたのか、そう口にした。

「レイス。奴らが来ているのかも知れない」

「奴ら……？ まさか『支配者』No.2！？」

「きつとエリールに暗示をかけたんだと思うよ。得体の知れない謎の人物だったから。ここで暗示を解かなきゃ、エリールは奴らに奪われてしまう……！！」

「正解。硝子の社『狩人』No.2 二重刀 だったアイカ・

エリランヌ。『狩人』だった経験もあるし、見破れるのも納得する」

「！？」

頭上から声が聞こえたので、アイカとレイスは顔を上げた。そこには、宙に舞う『支配者』No.2がいた。

「『支配者』No.2！ エリールに暗示をかけたのは、あんだで

しょ!？」

「おつと。あんたはオレたちの仲間じゃないんだ。オレたちのやることに割り込みは禁止だ。さっき、そう忠告したはずだろ？」

「……っ！」

アイカは悔しそうな表情で、『支配者』No.2を睨みつけた。

「用があるのは、お前だ。星龍騎士初級レイス・ネフィリー」

「おれに何の用だ」

「レイスの彼女はオレたち 硝子の社 の者とする。それを忠告しに来ただけだ。あと、アイカにも忠告するが、『狩人』だった頃の記憶はすべて消してもらおう。あと、エリールと関わった記憶全て、だ」

「……！」

レイスとアイカは、驚愕した。

「な、何でエリールと関わった記憶まで消すんだよっ！」

「その方が作業が楽になるし、苦しみもせずに済む。それとも苦しんでまで、エリールの存在を覚えていたいのか？」

「……まで……だろ……」

レイスが小さく呟く。

「え？」

「お前たちの都合のいいようにさせるかっ！ 今までの出来事が夢だったなんて、そんなことさせるわけにはいかないだろっ!!」

レイスは必死になって叫んだ。

「だけど、レイスのその言葉は エリールに届くわけがないだろう? まあ、いいさ。オレの人形と化したエリールに、抹殺してもらおうよ。そうすれば……キミは、何もかも失うだろう」

「!？」

「エリールにも、レイスの存在を忘れてもらう。そして、硝子の社は再び 10の秘具 の回収を再開させてもらう」

「……何でそんなに、大切なものを……おれから奪っていくんだよ」
「別にそんなに悲しいことじゃないだろう？ 記憶を全て消してしまえば、何もかも楽になれる。そうなれば そこにいるアイカと幸せになればいい」

「え」

レイスがアイカを見つめる。アイカは何故か、頬を赤らめていた。
「エルフィードが豹変したのも、アイカの気持ちだ。そして、アイカはお前が好きなんだぞ？」

「……」

レイスは、アイカをただ見つめることしかできなかった。

「そのアイカと共に暮らしていけば、エリールのことなんかどうでもいいと思えてくるだろう？ 幸せになることができる。ただそれを拒否するのは、キミだけだ」

「……アイカ、本当なのかよ」

「……」

アイカはただ、沈黙を保っていた。そのことから、レイスはその気持ちには本物だと察した。

「何で……おれは、エリールを忘れなきゃいけないんだよ」

そのことが1番、悲しかった。

いつだって傍にいてくれたパートナーのことを忘れる。そして、記憶を忘れたときには敵になる。

そうなってしまう未来を、レイスは想像すらしたくなかった。

「じゃあ、文句は言わないように」

『支配者』No.2は、懐から杖を取り出した。それは、対象の記憶を消す10の秘具の1つ『連』だった。

「さよなら。新たな人生は、幸せであるようにね？」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっつっ……!!」

レイスは必死になって叫んだ。

光は『連』を中心として放たれた。

CC・未来への手紙

忘れたくない。
忘れたくない。

大切だと思っていた人のことを、忘れたくない。

だれど おれは、運命に抗うことができなかった。

どうして、忘れないといけないのか。

硝子の社 『支配者』No.2のために 大切な人を奪われ、
忘れないといけないのか。

10の秘具 『連』を使用され おれの『狩人』時代と、エ
リールに関する記憶は全て消されてしまう。

封印されるわけじゃない。完全にこの世から消えてしまうのだ。

どんな希望があったって、もう2度と記憶は蘇ったりはしない。

完全に 消えてしまうのだから。

今、エリールはどんなことを思っているのだろう。

そんなこと、おれにはわからない。

だけど 幸せであるはずがない。

おれだって、悲しいよ。

どうしてこんなことになったのか、おれには全く理解できない。

運命に抗えないことが 悲しい。

悔しい。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

再び、そう思った。

これから、おれはどういう人生を歩むのだろう。

アイカと共に、平凡な生活を過ごすのだろうか。

星龍騎士を辞職して、いったいどうするのだろうか。

だけど、おれは 戦い続けたい。

エリールを連れ戻す。

何があっても、必ず 。

邪魔なんか絶対に、させない。

だから、未来のおれに託したい。

例えエリールのことを忘れてしまったとしても 、

硝子の社　に捕まっているエリールを連れ戻してほしい。

そして、再びあの平和な日々が訪れることを

ただ、おれは待ち望んでいる。

あとがき

こんにちは、種原美穂です。

「墮天使の行方」で初めて会うあなたは、はじめまして。種原美穂という者です。これから、よろしくお願いします。

さてさて。

「墮天使の行方」第1章が完結しました。

第1章が完結したので、もちろん第2章があります。

第2章では、エリールを連れ戻すレイスのことはもちろん、アイカとの接し方も重要などころになってきますね。

未だに結末を全く考えてはいないんですけど、どうでしょうか……。悩みに悩んでいる今日この頃です。

ここで、「墮天使の行方」の誕生日話でも。

種原は最初に謎を問いかけるのが好きなんです。「伏線」というやつでしょうか。それが好きです。……何故か「プリンセスの秘密」(前作)では全くありませんが。

何で「墮天使の行方」というタイトルにしたかは……よくわかりません。

別に「墮天使」という存在がでるわけでもありません。

しかし、「墮天使」に値する人物がいる。そういうわけです。

その正体が、皆様にはわかるでしょうか。「墮天使の行方」ですから、その人の行方を、この物語は描いているわけです。一応ですけど。

当初はアイカが主人公の予定でした。しかし、なぜかレイスが主人公になりましたね。

それにしても、終盤でアイカの存在が薄いですね。エリールの存在のほうが大きいじゃないですか。レイスの彼女だからですね。

この「墮天使の行方」を執筆している時は、いつも「英雄伝説 空の軌跡」というゲームのBGM「胸の中に」という曲をいつも流して執筆しています。終盤のほうは「告白」という曲を流していました。時々「想いの眠るゆりかご」という曲もありましたけど。今こうしてあとがきを書いている時も「告白」を流しています。今ではアイカと『先生』のテーマ曲は「胸の中に」になりつつある今日この頃です。

そういえば、「F c」に出てくる娯楽飛空艇・エリザベス（懐かしい…）は、「空の軌跡 the 3rd」を思いつきり意識していましたね。

それからまあ……ボチボチ。

さて、「墮天使の行方 - Second chapter -」。

近日連載開始予定です。

何故明日にでも連載を開始しないのかは……まあ、休憩の意味もあるんですけど、よみきり「It is by you」と完結済連載「プリンセスの秘密」の加筆と修正を行いたいと思います。たぶん、第2章は1週間後……？くらいには連載できると思うんで、それまでは待つていてください。

それでは「墮天使の行方 - Second Chapter -」で会えることを、願っています。

2008・10・26

種原美穂

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1354f/>

墮天使の行方-First chapter-

2010年10月8日15時00分発行